研　究　紀　要

第　12　号

青森県における装身具の集成

弥生時代～平安時代編

（付・縄文時代追加編）

２００７．３

青森県埋蔵文化財調査センター

例　言

1，本号の装身具集成は、前号の第11号（縄文時代編）に続き青森県から出土した弥生時代から平安時代までの装身具を集成したものである。なお、下北地域の弥生時代装身具については、第11号の余白を利用して図版３と図版４に掲載している。また、前号に掲載できなかった縄文時代の装身具を追加した。

2，集成の対象は、平成16年度まで県及び市町村刊行の発掘調査報告書等に掲載されたものである。

3，掲載資料の縮尺は、二分の一に統一した。

4，掲載資料の一部に時期判断が付かないものがあるため、複数の時代に掲載したものがある。

5，掲載資料の引用出典文献については、論文のみを本号に掲載し、発掘調査報告書類は当センターのホームページに掲載する予定である。また、掲載資料の出土地名表及び遺物観察表についても、当センターのホームページに掲載する予定である。

6，掲載資料の数量は、縄文時代3229点、弥生・続縄文時代・末期古墳885点、古代469点、計4583点である。

目　次

青森県における弥生時代・続縄文時代・末期古墳の装身具概要（永嶋　豊）……3

青森県における奈良・平安時代の装身具の概要（工藤　忍）……7

装身具出土遺跡分布図（宮嶋　豊）……12

資料図版（１～36）……15

弥生・続縄文時代・末期古墳編（永嶋　豊）……15

奈良・平安時代編（工藤　忍）……31

縄文時代追加編（鈴木克彦）……41

資料写真（小笠原雅行）……57

引用、参考文献目録（葛城和穂）……63

正誤表（青森県における装身具の集成──縄文時代編）……64

奥付

青森県における弥生時代・続縄文時代・末期古墳の装身具概要

永　嶋　　豊

はじめに

本県の弥生時代の装身具とされるものは、該期の遺跡数同様多くはないため、この集成では弥生時代の可能性のあるものは積極的に拾うこととした。続縄文時代とされる装身具は極めて少なく、現段階では八戸市市子林遺跡と七戸町森ヶ沢遺跡に限られる。所謂「末期古墳」とは、畿内大和勢力の影響下で日本各地で盛んに造営された前方後円墳の終焉（6世紀末頃）と時を同じくして、蝦夷の地で造営された直径十数m以下の小規模な円形の墳墓である。この末期古墳の埋葬主体部の中に、金属製品などと共に多数の装身具が副葬されるが、弥生時代に比して碧玉製管玉がほとんど見られなくなり、新たに瑪瑙製勾玉・水晶製の切子玉・ガラス製平玉（小玉）が主体となる。本稿では弥生時代、古墳時代併行期の続縄文時代、7世紀以降9世紀頃まで造営された「末期古墳」の装身具について触れる。

青森市以西を津軽地域、むつ市・東通村以北を下北地域、夏泊半島のある平内町以東を南部地域として、各時期各地域を概観する。

１　弥生時代の装身具

(1) 津軽地域（図版１）

装身具の出土は、弘前市砂沢遺跡・弘前市宇田野(2)遺跡・外ケ浜町宇鉄遺跡・田舎館村垂柳遺跡に集中する。弥生前期水田跡検出で有名な弘前市砂沢遺跡では、全て遺構外から勾玉（5）・碧玉製管玉（44）・平玉（23～29）・丸玉（40）が出土している。琥珀製の平玉はこの砂沢遺跡例（157）と垂柳遺跡例（158）に限られる。砂沢遺跡の2km南方の小河川沿いに位置する弥生時代前期の宇田野(2)遺跡では、勾玉（1・2）の他、翡翠製平玉（8～22）が連結した状態で谷地形の捨場から出土した。津軽海峡を臨む台地上に位置する宇鉄遺跡は、弥生時代中期の墓地遺跡である。土坑墓内あるいは土器棺と土坑壁面の間から多くの碧玉製管玉が出土しており、特に第14号土坑内外からは翡翠製丸玉1点（34）と共に総数365個の碧玉製管玉（49～137）が出土している。また第11号土坑墓では翡翠製勾玉1点（4）が副葬品の土器や置き礫と共に出土しており、青野友哉は北海道続縄文時代の南川葬法との類似を指摘する（青野 1999)。弥生時代中期の水田跡で有名な垂柳遺跡では、土坑墓内や遺構外から碧玉製管玉（147～156)・凝灰岩製平玉（37・38）に加え、骨角製管玉（162～164)・琥珀製平玉（158）の出土も見られる。

上記4遺跡以外では岩木川流域の五所川原市神明町遺跡土坑墓出土の翡翠製勾玉（3)、大光寺新城跡遺跡の翡翠製勾玉（7)・翡翠製丸玉（32)・碧玉製管玉（45)、垂柳遺跡に隣接する高樋(1)遺跡の泥岩製管玉（46)、小泊半島の坊主沢遺跡出土の碧玉製管玉（146)、平川市五輪野遺跡の土器棺内から出土した貝輪（165）が注目される。

(2) 南部地域（図版２）

装身具を出土した遺跡は津軽地方よりさらに少なく、六ヶ所村大石平（1）遺跡と八戸市是川中居遺跡の２遺跡にほぼ集約される。大石平（1）遺跡では土坑覆土中から17点の石製平玉（1〜17）が出土した。是川中居遺跡Ｇ区の前期末〜中期の土器棺と考えられる第４号埋設土器内部からは、赤色顔料や骨粉を含んだ土と共に10個の碧玉製管玉（23〜32）が出土した。そのうち半数のものは粗く折り取られた痕跡が報告されている。是川中居遺跡Ｇ区では、遺構外から緑色凝灰岩製の平玉（18〜20）・丸玉（21）に加え、琥珀製の勾玉（36）や珪質頁岩製ボタン状石製品（37）が出土している。小川原湖に隣接する姉沼に注ぐ沢に面した小山田（2）遺跡では弥生時代前期後半〜中期の竪穴住居跡２軒が検出されている。うち１軒の４号竪穴住居跡の炉周辺床面覆土から炭化米約500粒が出土し、住居覆土からは翡翠製垂飾品（35）が出土した。八戸市根城跡の有孔土製品（38）は装身具の他、紡錘車の可能性を残す。

(3) 下北地方（研究紀要第11号 図版３・４）

むつ市板子塚遺跡は、陸奥湾に注ぐ河川左岸の弥生時代中期の墓地遺跡である。９基の土坑墓が検出されており、副葬品が見られない他の土坑も墓の可能性が指摘されている。北海道続縄文時代の土坑墓同様に大量の石鏃が副葬され、翡翠（19）・琥珀（13）・緑色凝灰岩製（24）の勾玉、翡翠（27）・緑色凝灰岩（22・23・28・29）・チャート製（30）平玉の他、緑色凝灰岩の垂飾品（14・17・18・20・31・33）が目立つ。同じむつ市瀬野遺跡も陸奥湾に注ぐ河川右岸に位置し、拡張痕跡の残る径10m程の円形竪穴住居跡が１軒検出されている。住居跡覆土から高坏の口縁部突起様に装飾された土版（3-19）と碧玉製管玉（34）が出土している。同じくむつ市戸沢川代遺跡では遺構外から翡翠製のＥ字形勾玉（25）が出土している。

(4) 弥生時代まとめ

縄文時代以来の翡翠へ対する需要は依然残る一方、北海道の恵山文化圏同様に碧玉製管玉が盛んに求められたことが分かる。また翡翠や碧玉などの遠隔地の所謂高級石材の代用品として当地で調達できる緑色凝灰岩・泥岩・土製・骨角製などが用いられた。津軽地方の宇鉄遺跡（中期）、南部地方の是川中居遺跡（前期後半〜中期前葉）・大石平(1)遺跡（中期）、下北地方の板子塚遺跡（中期）と遺跡数は少ないが、中期を中心とした墓とされる土坑からの出土が目立つ。中でも碧玉製管玉は是川中居・砂沢・井沢遺跡等の比較的大型の一群と宇鉄・垂柳遺跡等の小型の一群に大きく分けられ、本県を含む東北地方北部では前期〜中期初頭に直径６㎜を超す大型品の分布が指摘されている（斎野1999）。大賀克彦の研究によれば、弥生時代開始期前後に朝鮮半島から搬入された「碧玉製管玉」の流通が列島内の管玉生産の契機となり、山陰を中心とした中国地方、近畿北部〜北陸西部、佐渡を中心とした北陸東部へとその生産開始が段階的に東遷したとされる（大賀 2001）。理化学分析（藁科哲男・福田友之 1997）や大賀の研究では、佐渡を含む北陸東部地域で製作された碧玉製管玉が東北地方へもたらされた可能性が高いようである。北陸東部の管玉生産は比較的古い例で中期中葉へ遡るようであるが（大賀 2006）、本県の弥生時代前期、新しく見ても中期初頭頃に位置付けられる是川中居遺跡Ｇ区第４号埋設土器中に副葬された管玉は北陸西部以西からもたらされた可能性を残す。

２　続縄文時代（古墳時代併行期）の装身具（図版２）

八戸市市子林遺跡において、４基の土坑墓が密集して検出された。石製平玉・石製管玉・琥珀製丸玉・ガラス製平玉・鉄釧が続縄文土器などと共に出土している。七戸町森ヶ沢遺跡では20基の土坑墓が調査された。報告書未刊のため詳細は不明であるが、『青森県史 資料編 考古３弥生～古代』に土坑墓ごとの出土品表と一部の写真が公開されている。蛇紋岩系の硬質な石材を用いた平玉が卓越し、ガラス小玉・琥珀玉の他に石炭質の埋木を丸玉状にしたものもある。琥珀製のものは勾玉・棗玉・丸玉・小玉等45点出土している。

３　末期古墳に伴う装身具（図版３～14）

本県の末期古墳ではおいらせ町阿光坊古墳群、八戸市丹後平古墳群・鹿島沢古墳が良く知られる。青森県の末期古墳は７世紀に太平洋側地域で造営が開始され、７世紀末～８世紀前半に増加し副葬・共献品の内容が豊富になり葬送儀礼が確立、８世紀後半～９世紀後半以降津軽地方にも分布を広げた（大野2005）。

阿光坊古墳群（阿光坊遺跡・天神山遺跡・十三森(2)遺跡）は、７世紀代～９世紀代の造営であり、土坑墓を含めると200基以上の埋葬施設の存在が想定されている（小谷地肇 2005）。埋葬主体部を中心に錫製の環状製品などと共に瑪瑙製・翡翠製・玉髄製の勾玉、水晶製切子玉、碧玉製管玉、琥珀製の丸玉・平玉、ガラス製の丸玉・平玉（小玉）、土製丸玉が出土している。丹後平古墳群と比べて、水晶製切子玉や土製玉類が非常に少ない。

鹿島沢古墳は馬淵川右岸の標高80～90mの丘陵地に立地しており、丹後平古墳群にやや先行し７世紀のものとされる。金環・青銅製釧・ガラス玉・瑪瑙製勾玉・水晶製切子玉と管玉が出土している。

丹後平古墳群は、鹿島沢古墳の南1.5km、馬淵川の右岸の標高80～100mの丘陵尾根部に位置する。金環・鉄製と錫製釧・環状錫製品の他、玉類は瑪瑙製勾玉・水晶製切子玉・土製丸玉と平玉が多く、特にガラス製小玉が卓越する。勾玉は阿光坊古墳群同様にほぼ瑪瑙製に限られるが、碧玉・水晶製も僅かに持ち込まれている。切子玉は水晶以外は用いられず、瑪瑙・琥珀製の棗玉が僅かに１点ずつ見られる。碧玉製管玉は弥生時代と比して激減しており、僅かに翡翠製も見られるが、管玉自体、また玉素材としても碧玉・翡翠がガラス・瑪瑙・水晶に主役の座を譲っている。他に青銅製の中空の玉、所謂空玉が出土している。坂川進の分析によれば、玉が多数出土した数基の古墳においては、勾玉：切子玉：管玉：ガラス玉の比率は概ね１：３：６：80の比率をなし、被葬者の頭部と推定される箇所から集中的に出土することから、首飾りの１セットと考え、良好な出土例からその配列も復元されている（八戸市教育委員会 1991）。また多数の玉類を出土した古墳からは錫釧や鉄釧や環状錫製品といった装飾品が伴う反面、一部を除いて刀類と玉類が共伴することは無く、被葬者の性格の相違が指摘されている。同様の傾向は阿光坊古墳群でも認められる。また末期古墳では、主体部底面付近で出土するものと主体部上位または墳丘部や周溝内で出土するものがあり、前者は副葬品、後者は供献品と考えられることが多い。副葬品には土器は早い段階を除いてほとんど無く、刀類・刀子・釧・耳環・玉類に限定される。連珠用の紐を切られた玉類・折り曲げられた刀子、周溝から打ち欠いたと考えられる土器片が出土することは、該期の葬送観念を表しているのであろうか。主体部の作りの違い、副葬品・共献品の質量にわたる差異が存在することは、時期差に加え被葬者の性格の差異をも示唆しており、蝦夷の社会構造の一端を示している。

『引用・参考文献』

青野友哉　1999「大洞～恵山式土器の墓と副葬品」『海峡と北の考古学』日本考古学協会1999年度釧路大会

大賀克彦　2001「弥生時代における管玉の流通」『考古学雑誌』第86巻第 4 号

大賀克彦　2006「「碧玉」製玉類の生産と流通」『季刊 考古学』第94号

大野　亨　2005「蝦夷の墓－青森県の終末期古墳－」『青森県史　資料編　考古 3 弥生時代～古代』

小谷地肇　2005「集落と墓域－発掘調査成果から－」『阿光坊古墳群シンポジウム記録集』

斎野裕彦　1999「東北の弥生から見た北海道文化」『海峡と北の考古学』日本考古学協会1999年度釧路大会

八戸市教育委員会　1991『丹後平古墳』八戸市埋蔵文化財調査報告書第44集

藁科哲男・福田友之　1997「青森県宇鉄・砂沢・垂柳遺跡出土の碧玉製管玉・玉材の産地分析」『青森県立郷土館調査研究年報』第21号

青森県における奈良・平安時代の装身具の概要

工　藤　　忍

はじめに

装身具とは、飾りとして身体や衣服につける工芸品であり、現代では一般に櫛・簪・指輪・髪飾り・腕輪・耳飾りなどを指す。青森県の古代の装身具を集成するにあたって、遺跡から出土した形態的に小型のもので、単体または紐等で身体に装着可能な遺物を装身具として規定し抽出することとした。櫛類は本県でも古代の住居跡から出土する例が認められ、髪飾りとしての使用も連想されるものではあるが、平安時代から江戸時代までの女性の髪型は主に垂髪であり、装飾品として使用された可能性が薄いものと考えられるため、装身具としての抽出を行わないこととした。

一般に古代の装身具は型式設定がされていないものが多く、遺物単独で帰属年代を導くことは困難である。本稿で取り扱う装身具は、装身具とした遺物のうち古代の遺構に伴い出土したもの、遺構外出土遺物については、古代に位置づけられる可能性が高い遺物を選択し取り扱うこととした。遺物の名称は、報告書記載の名称に従い、地域ごと、さらに形態ごとに集成した。

集成した古代装身具は、種類別・材質別に分類し、地域ごとに遺構における出土状況や数量的な傾向を把握した後に、年代別の出土傾向や性格について総括し、考察を行った。なお、本稿では古代の様相理解のため、一部古墳時代や中世の事例も取り扱うこととする。

１　古代の装身具の様相

前述した、本稿における装身具の定義に該当する古代の遺物としてあげられるものとして、勾玉や丸玉・管玉・切子玉などの玉類や、環状やペンダント状を呈する金属製品、有孔の石製品・土製品がある。これらを総合した結果、抽出した遺物は469点を数える。地域により発掘調査件数の多寡があるため単純には比較できないが、青森県内における数量的出土傾向では、南部地域では三八地域、津軽地域では中弘南黒地域において出土点数が多く、下北地域では現在のところ出土事例が見られない。総遺物点数で比較すると津軽地方に多く出土している。

玉類について概観する。玉類では、勾玉・丸玉・管玉・切子玉がみられ、土製・石製・ガラス製・琥珀製・魚骨製のものがある。石製品ではこの他に有孔のもの、土製品では、現代における魚釣りに使用するナス型錘に類似するものも見られる（図版15-76～78）。石質は蛇紋岩・泥岩・安山岩・頁岩・凝灰岩・滑石が見られるが、色彩面で石材を選択した可能性は低い。ガラス製品では丸玉、切子玉、琥珀製品では丸玉が見られる。玉類の中では丸玉が最も多く出土している。南部・津軽両地域で土製品の比率が高く、次いで石製品が一定量出土している。ガラス製品・琥珀製品・骨製品は数量的に少ない。ガラス製品や琥珀製品は南部地域のみ出土している。琥珀製品については、産地が岩手県久慈市に求められる。岩手県久慈市中長内遺跡では古代の琥珀玉類生産工房跡が検出され、久慈市周辺の古代竪穴住居跡からの出土例も多く認められており[(1)]、青森県南部地域においても琥珀製品が流通し使用されたものと思われる。魚骨製品は津軽地方のみ出土している（図版22-27・28）。

玉類の出土する遺構は、竪穴住居跡や土坑、溝跡からの出土が認められ、地域的・時期的にも共通の傾向を示す。圧倒的に多数を占めるのは、竪穴住居跡からの出土であり、出土位置としては、床面付近の覆土からの出土例が最も多い。他にカマド火床面、カマド焚き口周辺床面、周溝、住居跡床内（堀方）からの出土があり、比較的床面直上やカマド周辺部からの出土例が多い。

数量的には、１軒の竪穴住居跡からは１点出土する例が多いものの、複数個の玉類が出土する例も認められる。丸玉が２～３点程出土している事例は青森県内で29例、土製勾玉が２点出土する事例は青森市野木遺跡[2]で認められる。丸玉の出土点数が多い遺跡としては、南部三八地域の八戸市市子林[3]遺跡・新井田古館遺跡[4]、南部上北地域のおいらせ町（旧下田町）向山（4）遺跡[5]、津軽東青地域の青森市朝日山（2）遺跡[6]、津軽西北五地域の五所川原市隠川（12）遺跡[7]、同市隠川（2）遺跡[8]、津軽中弘南黒地域の青森市（旧浪岡町）野尻（1）遺跡[9]、野尻（4）遺跡[10]等がある。特筆すべきは、野尻（4）遺跡第19号建物跡出土例である。カマド付近床面より土製の勾玉１点と丸玉が７点出土しており、土製勾玉（図版20-85）の両脇に大きめの丸玉（図版22-9・10）があり、さらに両脇には比較的小型の玉（図版22-6～8・11・12）が並んだ状況で出土している。出土状況を積極的に捉えるならば、紐で連結していた状況が推測されるが、紐は出土していない。本例は平安時代に比定され、玉類の使用状況を最も良好に示すものである（写真４）。他に１カ所の住居跡から玉類を多量に出土する類例は市子林遺[11]跡や向山（4）遺跡[12]でも見られる。市子林遺跡からは石製勾玉と石製丸玉が平安時代の竪穴住居跡カマド付近で集中して出土し、（図版15-2～9）、向山（4）遺跡では奈良時代の竪穴住居跡カマド付近で土製丸玉が紐で連結されていたように集中して出土している（図版15-46～75）。

環状金属製品では、鉄製・錫製・銅製のものがあり、古墳時代における耳環や釧と類似している。奈良時代から平安時代に時期特定できるものの点数は玉類に比べて少ないが、南部地域では八戸市とおいらせ町（旧下田町）付近の奈良時代の集落遺跡における竪穴住居跡の覆土から出土しており（図版17-13～16）、津軽地域では平安時代の集落遺跡である青森市（旧浪岡町）野尻（4）遺跡[13]住居跡の掘方や、住居跡外周溝の覆土からの出土が見られる（図版22-29～30）。八戸市やおいらせ町（旧下田町）には終末期古墳の存在が認められ、また野尻（4）遺跡が存在する青森市（旧浪岡町）を中心とする地域には、墓域を想定させる円形周溝が多く検出されており、墳墓との関連が認められるようである。金属製品としては、ほかにペンダント状を呈する製品が出土している（図版22-31）。

有孔の石製品は、比較的津軽地域からの出土が多いものの全体の出土点数は少ない。形状は円形で扁平なもの、環状・楕円形のものがあり、中央付近に穿孔するものと、端部に穿孔するものがある。これらは外面に整形のため調整した痕跡が見られるが、石製勾玉と比較すると概して粗雑な印象を受ける。石質には凝灰岩、泥岩、安山岩、頁岩、砂岩、翡翠があり、凝灰岩や頁岩が比較的多い。

２　装身具の年代別出土傾向

古代の装身具は終末期古墳を除き一般に竪穴住居跡からの出土例が多い。とりわけ玉類は比較的出土量が多く、年代が把握できる遺物と共伴し出土する例が多いため、玉類を軸として装身具における年代別の出土傾向を述べる。

古墳時代から飛鳥時代（７世紀から８世紀初頭）のものでは、勾玉、丸玉、管玉がある（丸玉図版15-22～29、16-15・16・18・20、管玉図版15-79）。いずれも土製のものであり、南部地域の八戸市・

おいらせ町（旧下田町）周辺の住居跡覆土や床面から出土している。土製勾玉の形状は「コ」の字形に屈曲するものとなだらかに屈曲するものの 2 種類見られ、外面にミガキ調整が施されているものも見られる（土製勾玉図版15-18、16-1～4）。

奈良時代の資料では勾玉、丸玉の他に環状金属製品が認められる。勾玉は土製のみ見られ、形態的な特徴は前代と同様な傾向である（図版15-16・17、16-5～7・9～11）。丸玉では土製品に加えて石製品やガラス製品が認められ（図版15-11、17-10～11）、大きさは土玉と同様である。また、有孔の石製品も見られるが（図版15-13・14）、数量的には土製のものが多い。環状金属製品は、土玉やガラス玉と伴出する例が 2 遺跡で見られる（ふくべ（3）遺跡第27号住居跡（図版15-25・26・図版17-13：住居覆土））・田面木平（1）第48号住居跡（図版17-12・図版17-16：住居覆土）。奈良時代の装身具も、出土地域は南部地域の八戸市とおいらせ町（旧下田町）周辺に偏在しており、前代の出土傾向と同様である。本時期以前の遺物は、津軽・下北地域からは出土が見られないようである。

平安時代（ 8 世紀末～12世紀後葉）の資料では、勾玉、丸玉、管玉、有孔石・土製品、環状金属製品が認められる。これまで南部地域の八戸市やおいらせ町（旧下田町）周辺で出土していた装身具類は、本時期になると出土範囲を拡大し、これまで出土しなかった津軽地域においても出土するようになる。勾玉は、形態は、全体形状が「コ」の字形を呈するものより、屈曲がなだらかで、表面の調整を簡略化したような製品の割合が高くなるようである。丸玉は石製、土製、琥珀製、ガラス製のものがあり、土製品が最も多い。

南部地方の土製品は奈良時代では直径 1 ㎝前後のものが主であったが、直径 2 ㎝前後のものも多くなる。津軽地域の製品も南部地域の傾向と同様に大振りなものがあり、中には直径 3 ㎝のものも見られる。また、制作途中のものか簡略化のものか不明であるが、完全に穿孔されないものも散見される（図版20-10・47、図版21-3）。また、ガラス製品（野辺地町向田（35）遺跡[14]（図版17-9）や琥珀製品が見られ、琥珀製品は古代においては本時期が初出である（（八戸市岩ノ沢平遺跡[15]（図版17-17～19）、砂子遺跡[16]（図版17-20・21））。管玉は土製のものであり、津軽地域でわずかに見られる（図版20-9、22-26）。環状金属製品は、津軽地域のみで出土例がある（図版22-29・30）。

平安時代の装身具では、勾玉・丸玉とも南部・津軽両地域で見られるが、津軽地域から比較的多く出土し、数量的に石製品よりも土製品が多い。 9 世紀から10世紀にかけての出土例が多く認められるが、南部・津軽地域とも10世紀後半になると出土例が減少し、11世紀半ば以降には出土が見られなくなる傾向がある。

3　まとめと考察

古代における青森県出土の装身具は、勾玉は石製・土製、丸玉は石製・土製・ガラス製、管玉は土製といった材質が選択され作られている。飛鳥時代では古墳の主体部に副葬品として使用され、また古墳の周辺地域においては奈良時代にかけて竪穴住居跡の覆土をはじめ、カマド本体の覆土や周辺部、床からの出土例が見られる。平安時代になると、それまで南部地域のみで出土していたものが、津軽地域で 9 世紀頃の竪穴住居跡から出土するようになり、南部・津軽地域とも10世紀頃に最も出土例や出土量が多くなる。前述した、玉類が並んで出土した市子林遺跡や野尻（4）遺跡の事例はこの時期のものである。10世紀後半になると出土事例が減少傾向となり、平安時代末期の11世紀半ば以降には収

束する傾向が伺われるが、中世では青色ガラス製の丸玉が竪穴遺構や土坑墓と思われる遺構から出土する事例があり（十三湊遺跡[17]第145次調査第３号竪穴遺構覆土、十三湊遺跡[18]第91次調査第22号土坑覆土）、中世以降の玉類や環状金属製品との関連が注目される。

特殊な遺物として、衣服を整えるために用いる帯の付帯具である腰帯具がある。これは律令体制との接触を示す遺物であり、丸鞆・鉈尾・巡方等に細分される。青森県内では、銙帯金具は八戸市丹後平古墳群、丸鞆は石製のものが青森市新町野遺跡[19]（図版18-7）、おいらせ町（旧下田町）十三森遺跡、六ヶ所村表館（1）遺跡で出土しており、鉈尾は五所川原市観音林遺跡[20]から出土している。新町野遺跡出土丸鞆は竪穴住居跡床面からの出土であり、平安時代の年代が与えられている。遺物の出自や当時の流通について考察する上で注目される資料である。

古代における装身具の出土量は、竪穴住居跡１軒あたり１～２点の例が多いが、また全く出土しない竪穴住居跡が多数認められる。しかしながら前述したように、多数の遺物が床面直上やカマド周辺から出土する例も認められる。玉類が集中し出土する竪穴住居跡は、遺跡内でも比較的大型の平面形を有するもの[21]、遺構内外に特徴的な施設を持つもの[22]（外周溝やロクロピット等）を有する）、遺構群の中央部に位置するといった、集落内でも特殊な住居である傾向がある。これらのことから、古代における装身具を多く出土する遺構（住居跡）は、集落の中で特殊な性格を有していたとも考えられるが、特殊性が認められない事例も見られるため断定は避けたい。

複数の装身具を出土する竪穴住居跡の土層堆積状況を分析すると、カマド付近や床面直上より出土する遺物は、人為堆積土により覆われる事例が多い。

向山（4）遺跡や市子林遺跡、野尻（4）遺跡のカマド袖部付近で出土した土製勾玉や丸玉の出土状況は、当時の使用状況を示すものと思われる。市子林遺跡の出土例では、石製勾玉１点と多数の丸玉が集中して出土し、野尻（4）遺跡の出土例では、土製勾玉を中心にして大きめの丸玉を配置し、さらに両脇に比較的小型の玉が並んだ状態で出土している。このことから、勾玉は玉類の中でも特別な意味合いを持っていたと思われる。

他の特殊な出土事例として、青森市野木遺跡における水場遺構底面より土玉が出土する例[23]（図版19-70）や同市野尻（4）遺跡[24]の住居跡覆土の焼土直上から出土する例（図版21-54）といった例も認められている。

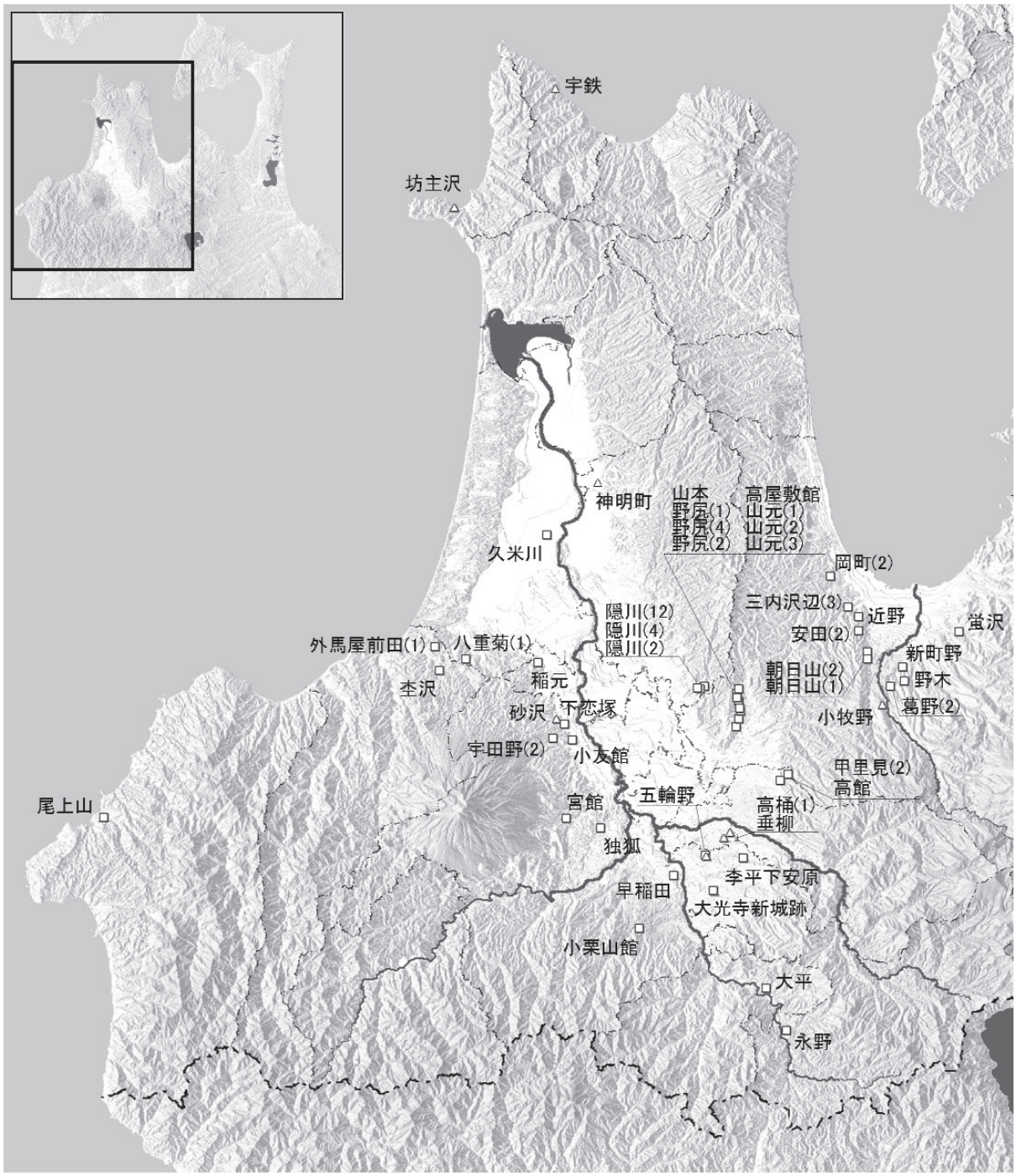
古代における装身具の性格について考察する。遺物の種類は、玉類では勾玉、丸玉、管玉があり、その他環状製品やペンダント状の製品がある。これらの製品は、勾玉や丸玉、環状製品といった特定の形式にほぼ固定化しており形状の分化が乏しい。加えて、竪穴住居跡内のカマド周辺に出土が特に多いことや、竪穴住居跡の廃絶直後に堆積する床面直上人為堆積土からの出土例、また、焼土直上から出土するなど、非日常的な出土例が多い。これらの出土状況は「物送り」のような住居廃棄や施設廃棄（人為堆積、破壊）時の祭祀に伴って使用されたものと考えられ、住居跡におけるカマド周辺の出土例は、カマドが精神的な住居の中心として位置づけられていたことを示すものかもしれない。装身具は、祭祀を執り行った人間か、住居に居住していた家長的な位置の人間が使用していた可能性が考えられる。

装身具が祭祀目的に使用されたとするならば、青森県内においては、「送り」祭祀は初源が終末期古墳に求められ、飛鳥時代から平安時代にかけて、住居の廃絶時に執り行われたと考えることができ

る。その風習が11世紀に減少する理由は、当該期の遺跡数の少なさによるものと思われる。

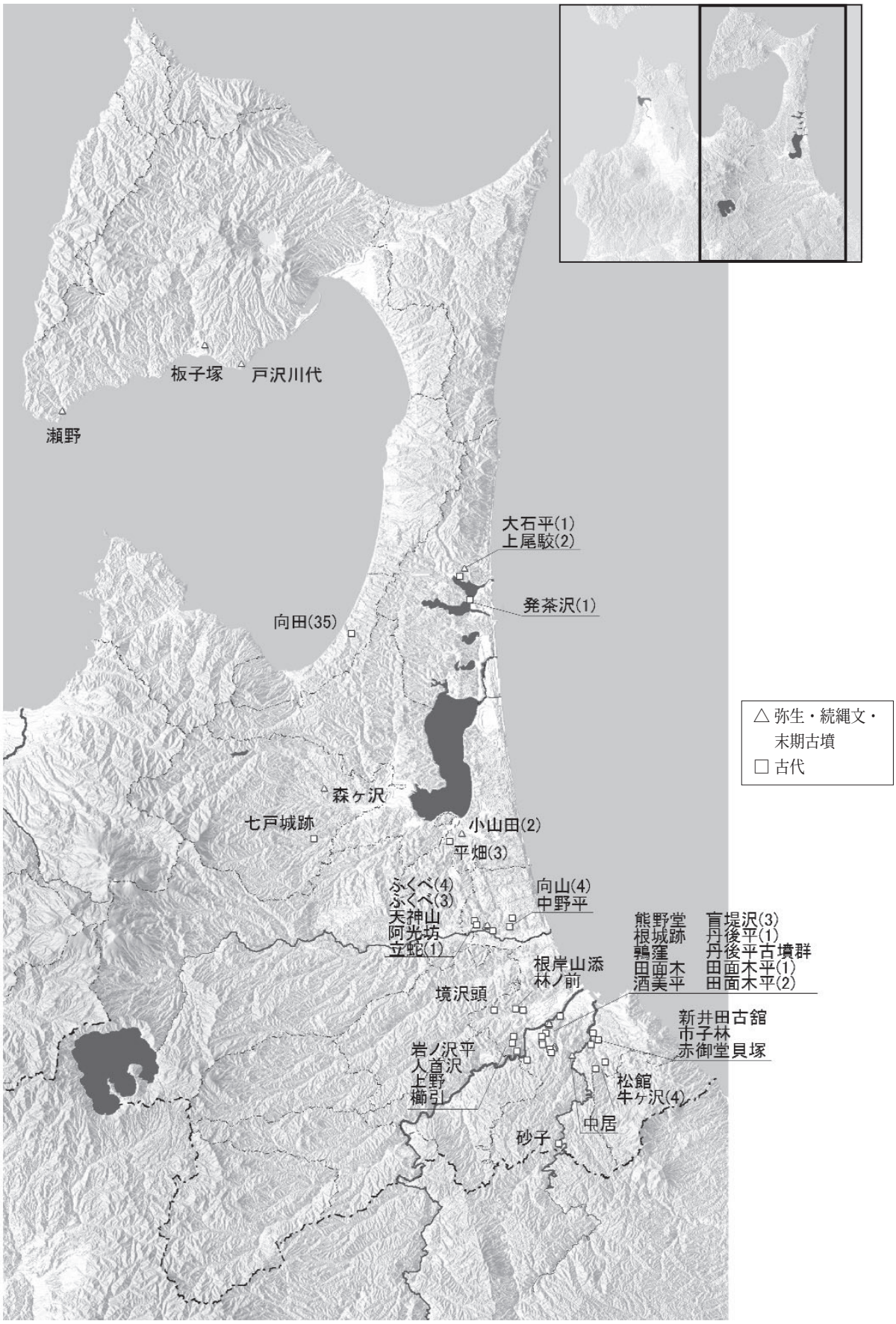
古代の装身具の様相は、特に下北地方の資料や津軽地方における奈良時代の集落・墳墓をはじめとする古代全般の調査事例の増加を待ち、中世以降の装身具の出土様相も合わせ改めて検討する必要があろう。

(1) 田村栄一郎　『琥珀誌』　1988
(2) 青森市教育委員会　『野木遺跡発掘調査報告書Ⅱ』　2000
(3) 八戸市教育委員会　八戸市埋蔵文化財調査報告書第108集『八戸市内遺跡発掘調査報告書21』　2004
(4) 八戸市教育委員会　八戸市埋蔵文化財調査報告書第94集『新井田古館遺跡』　2002
(5) 下田町教育委員会　下田町埋蔵文化財調査報告書第17集『向山(4)遺跡発掘調査報告書－土砂採取に係る発掘調査報告書－』　2002
(6) 青森県教育委員会　青森県埋蔵文化財調査報告書第369集『朝日山(2)遺跡Ⅸ』　2004
(7) 青森県教育委員会　青森県埋蔵文化財調査報告書第244集『隠川(4)遺跡・隠川(12)遺跡遺跡発掘調査報告書』　1993
(8) 五所川原市教育委員会　五所川原市埋蔵文化財調査報告書第22集『隠川(2)外遺跡発掘調査報告書』　2000
(9) 青森県教育委員会　『野尻(1)遺跡Ⅴ発掘調査報告書』　2003
(10) 青森県教育委員会　青森県埋蔵文化財調査報告書第186集『野尻(4)遺跡』　1996
(11) (3) に同じ
(12) (5) に同じ
(13) 浪岡町教育委員会　浪岡町埋蔵文化財緊急調査報告書第10集『野尻(4)外遺跡』　2004
(14) 青森県教育委員会　青森県埋蔵文化財調査報告書第373集『向田(35)遺跡』　2004
(15) 八戸市教育委員会　八戸市埋蔵文化財調査報告書第46集『岩ノ沢平遺跡』　1992
(16) 青森県教育委員会　青森県埋蔵文化財調査報告書第280集『砂子遺跡』　2000
(17) 市浦村教育委員会　市浦村埋蔵文化財調査報告書第15集『平成13年度第145次発掘調査報告書　十三湊遺跡』2003
(18) 青森県教育委員会　青森県埋蔵文化財調査報告書第398集『第10・11・15・16・74・91次発掘調査報告書 十三湊遺跡』　2005
(19) 青森県教育委員会　青森県埋蔵文化財調査報告書第275集『新町野遺跡Ⅱ』　2000
(20) 五所川原市　『広報ごしょがわら』第742号 1991。資料提供について、五所川原市教育委員会の佐藤文孝氏にお世話いただいた。記して感謝申し上げる。
(21) 青森市教育委員会　『野木遺跡発掘調査報告書Ⅱ』　2000　第533号住居跡、青森県教育委員会『隠川(4)遺跡・隠川(12)遺跡発掘調査報告書』　1993　隠川(12)遺跡第 2 号竪穴住居跡
(22) 下田町教育委員会　下田町埋蔵文化財調査報告書第17集『向山(4)遺跡発掘調査報告書－土砂採取に係る発掘調査報告書－』　2002　第 4 号竪穴住居跡、青森県教育委員会『隠川(4)遺跡・隠川(12)遺跡発掘調査報告書』　1993　隠川(12)遺跡第 2 号竪穴住居跡
(23) 青森県教育委員会　青森県埋蔵文化財調査報告書第281集『野木遺跡Ⅲ』　2000
(24) (13) に同じ



第１図　津軽地域の資料掲載遺跡（弥生時代～平安時代）

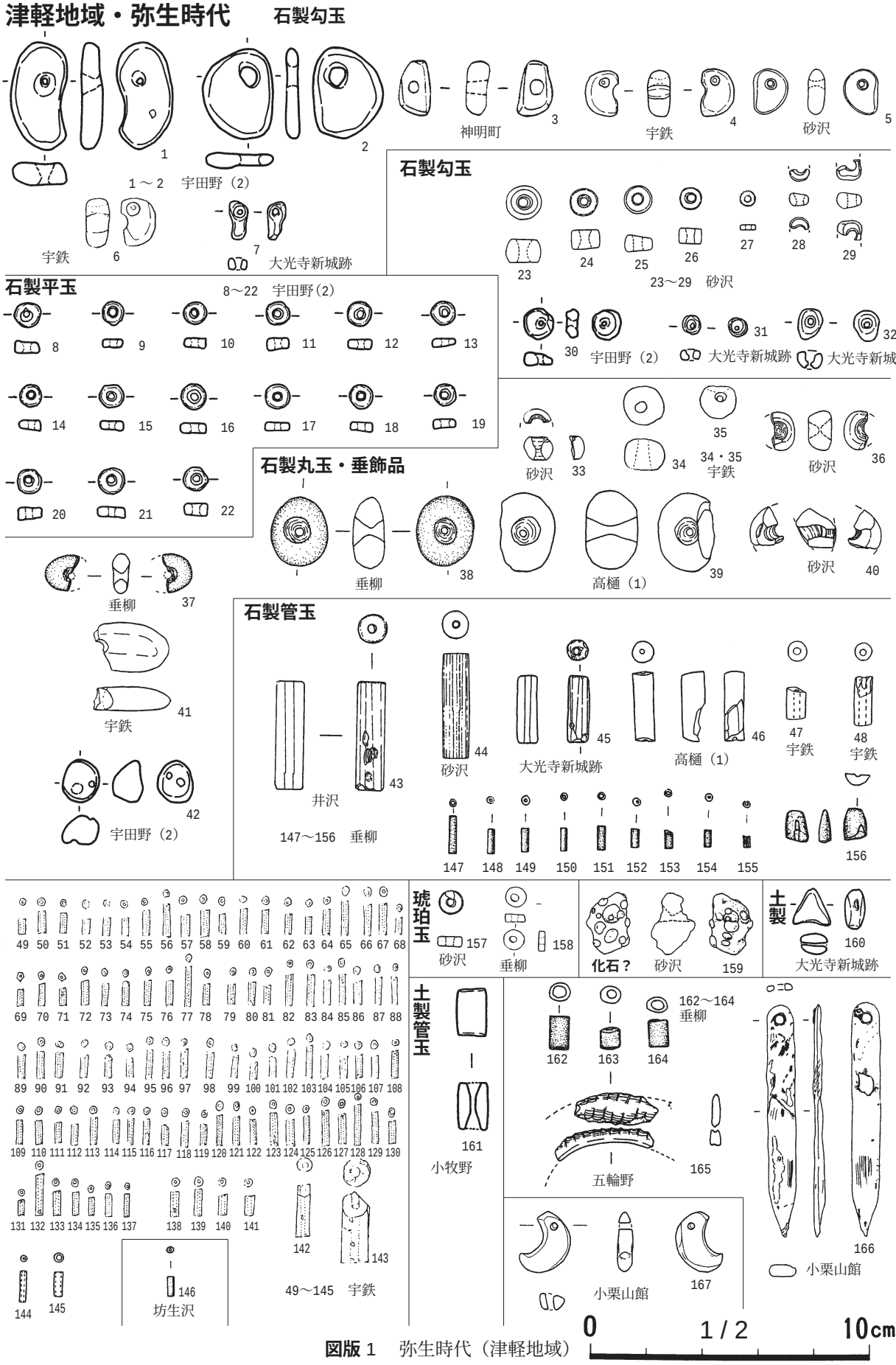
△ 弥生・続縄文・末期古墳
□ 古代



第 2 図　南部地域の資料掲載遺跡（弥生時代～平安時代）

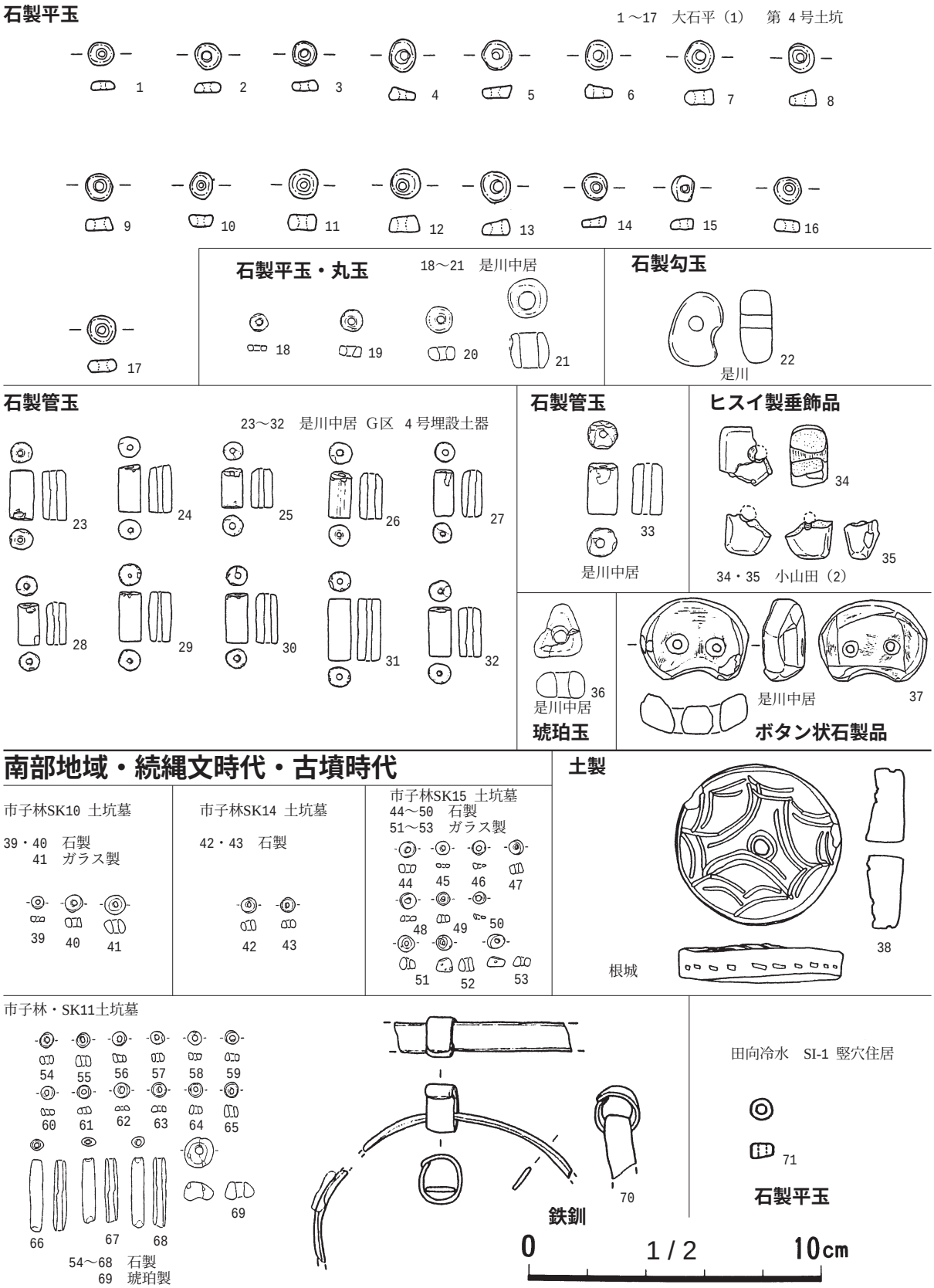
青森県における装身具の集成

弥生・続縄文時代・末期古墳編

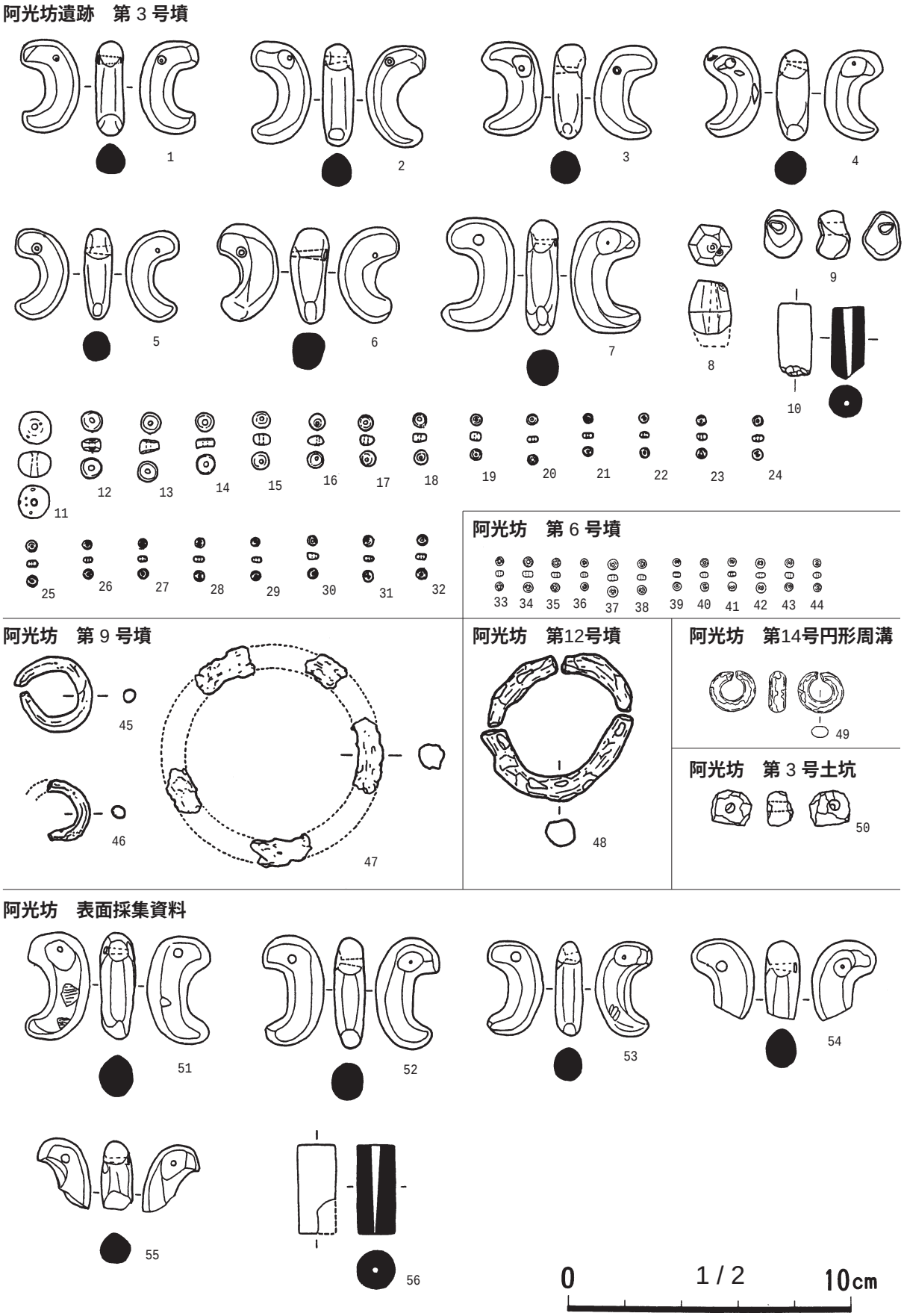


図版1　弥生時代（津軽地域）

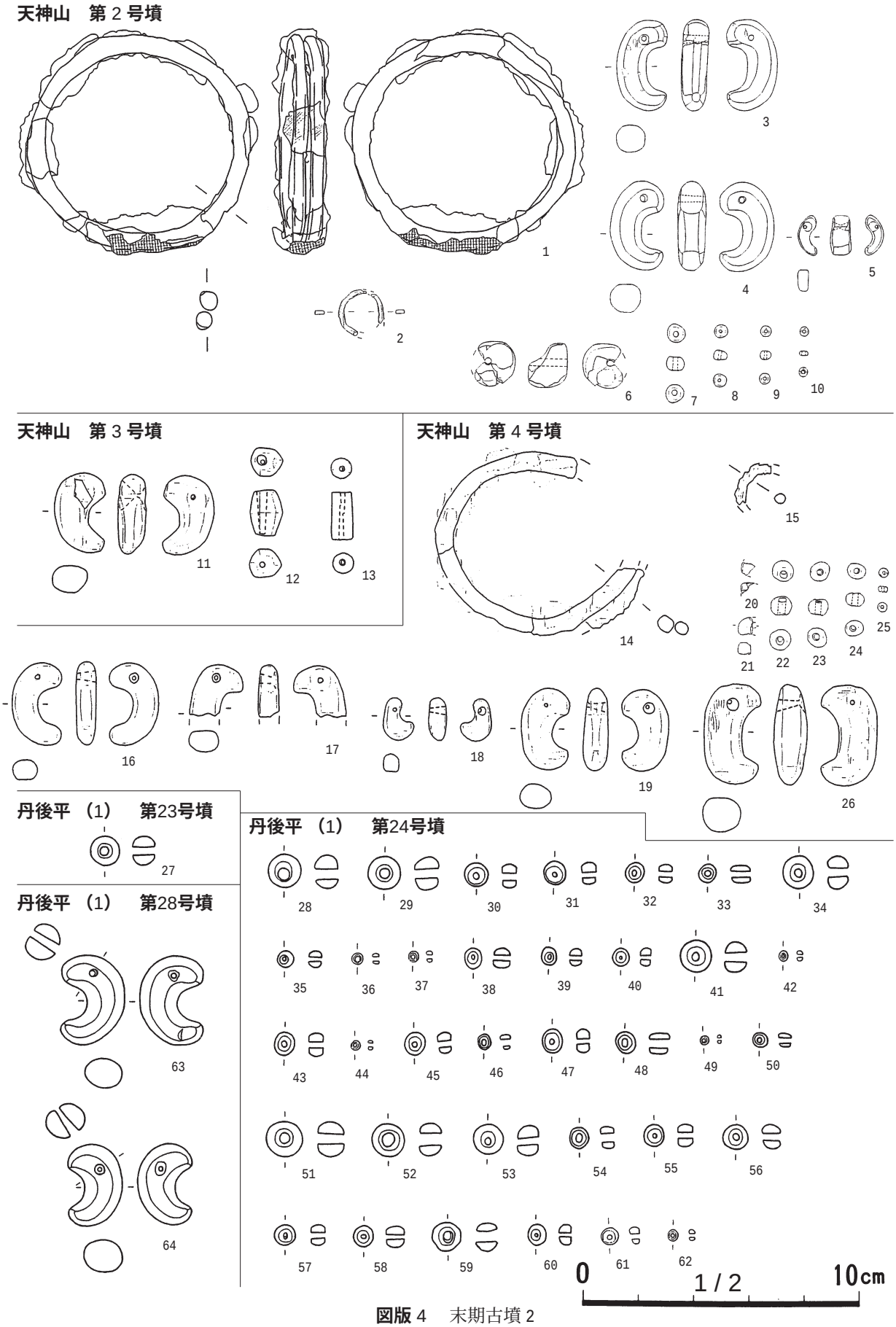
南部地域・弥生時代



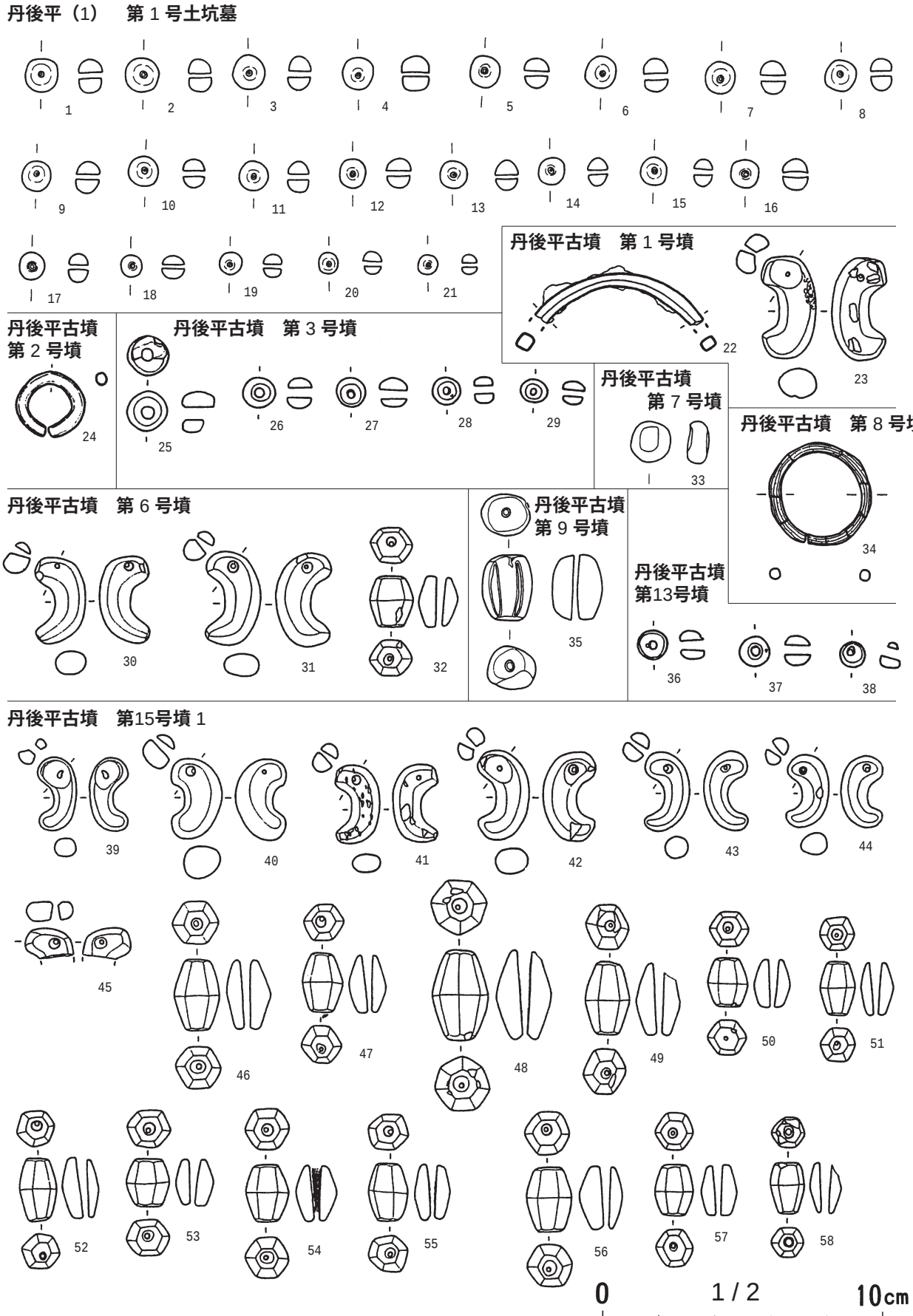
図版 2　弥生時代（南部地域）・続縄文時代


阿光坊遺跡　第 3 号墳
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
阿光坊　第 6 号墳
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
阿光坊　第 9 号墳
45
46
47
阿光坊　第12号墳
48
阿光坊　第14号円形周溝
49
阿光坊　第 3 号土坑
50
阿光坊　表面採集資料
51
52
53
54
55
56
0
1 / 2
10cm

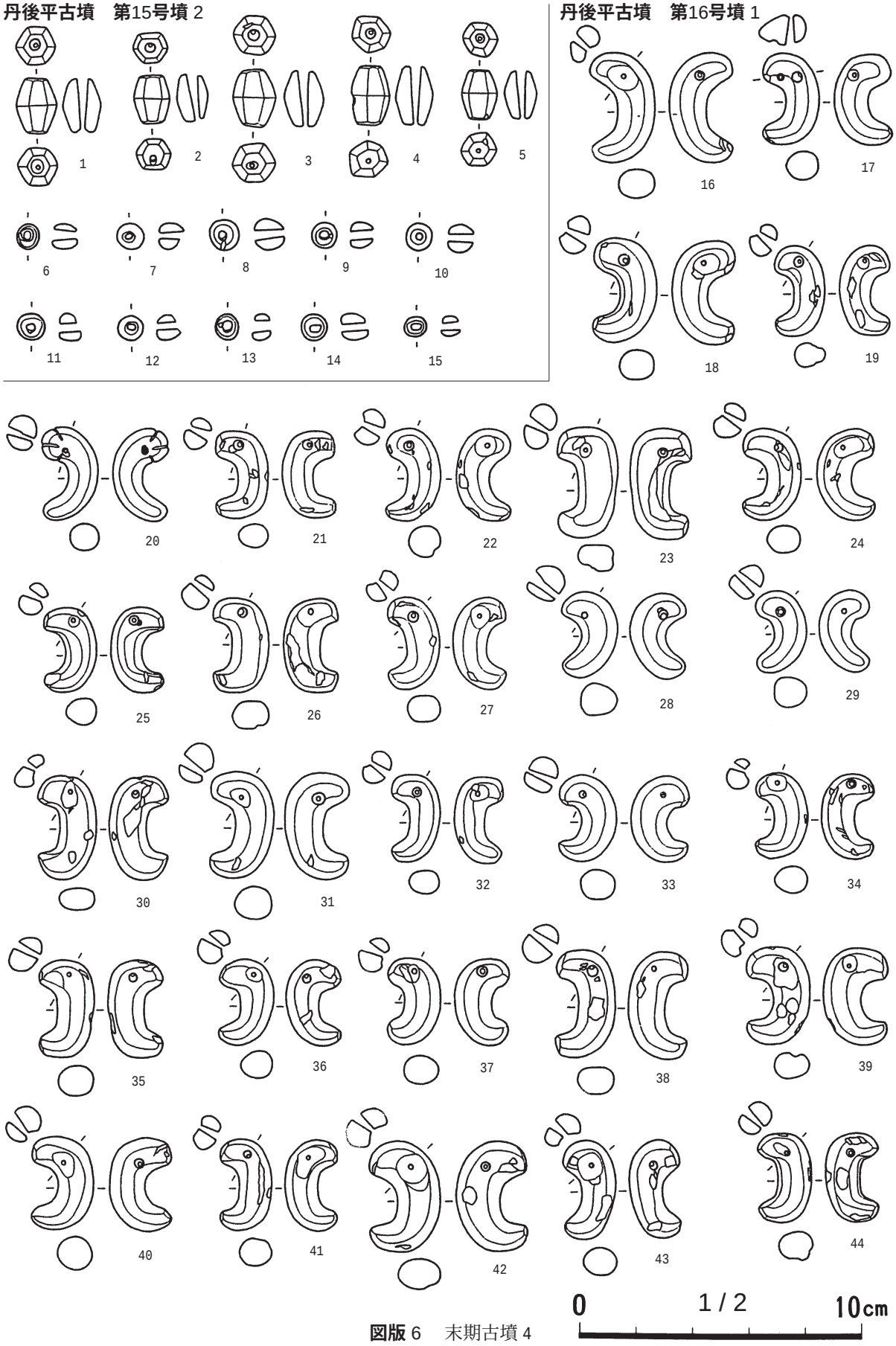
図版 3　末期古墳 1


天神山　第 2 号墳
天神山　第 3 号墳
天神山　第 4 号墳
丹後平 （1）　第23号墳
丹後平 （1）　第24号墳
丹後平 （1）　第28号墳
0
1 / 2
10cm

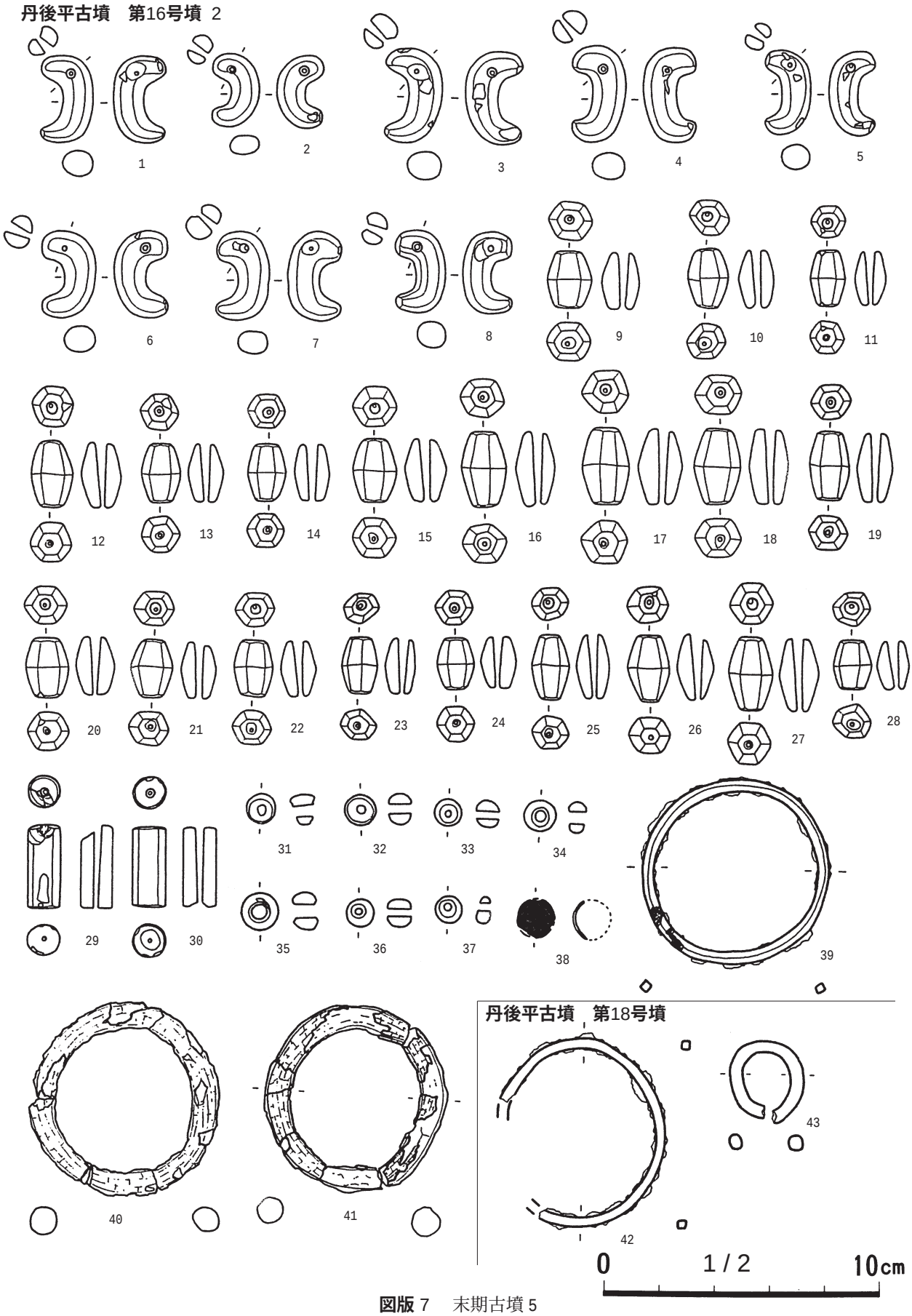
図版 4　末期古墳 2


丹後平（1）　第 1 号土坑墓
丹後平古墳　第 1 号墳
丹後平古墳
第 2 号墳
丹後平古墳　第 3 号墳
丹後平古墳
第 7 号墳
丹後平古墳　第 8 号墳
丹後平古墳　第 6 号墳
丹後平古墳
第 9 号墳
丹後平古墳
第13号墳
丹後平古墳　第15号墳 1
0
1 / 2
10cm

図版 5　末期古墳 3

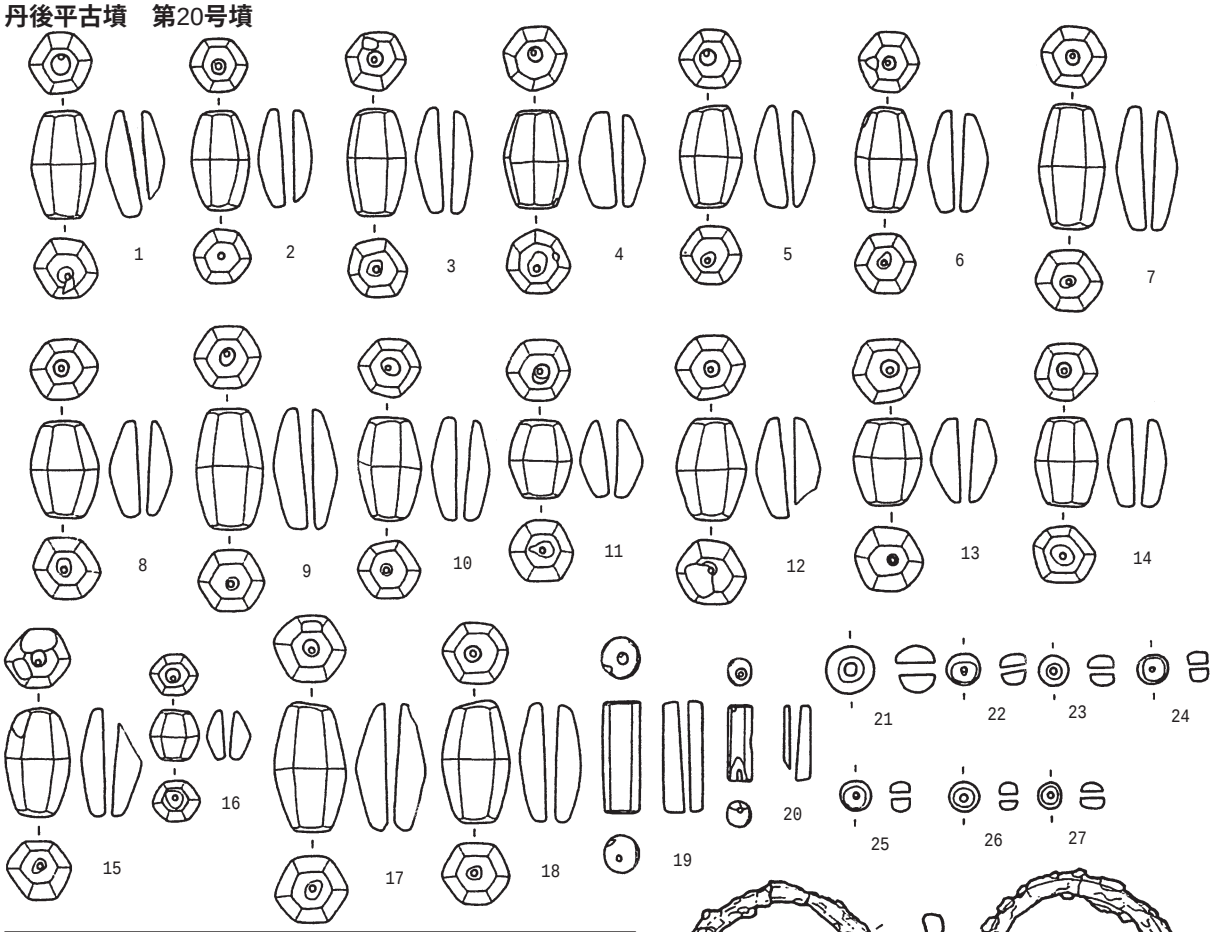

丹後平古墳　第15号墳 2
丹後平古墳　第16号墳 1
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
0
1 / 2
10cm

図版 6　末期古墳 4

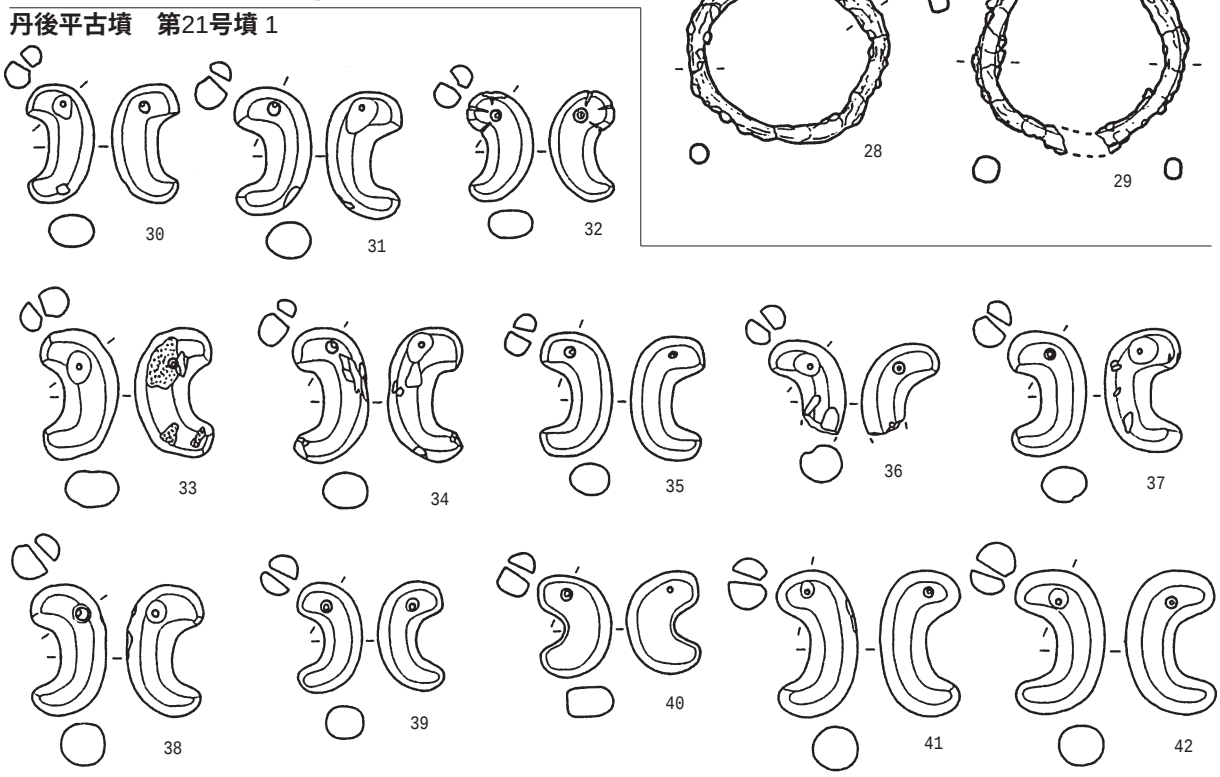

丹後平古墳　第16号墳 2
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
丹後平古墳　第18号墳
42
43
0
1/2
10cm

図版 7　末期古墳 5

丹後平古墳　第20号墳

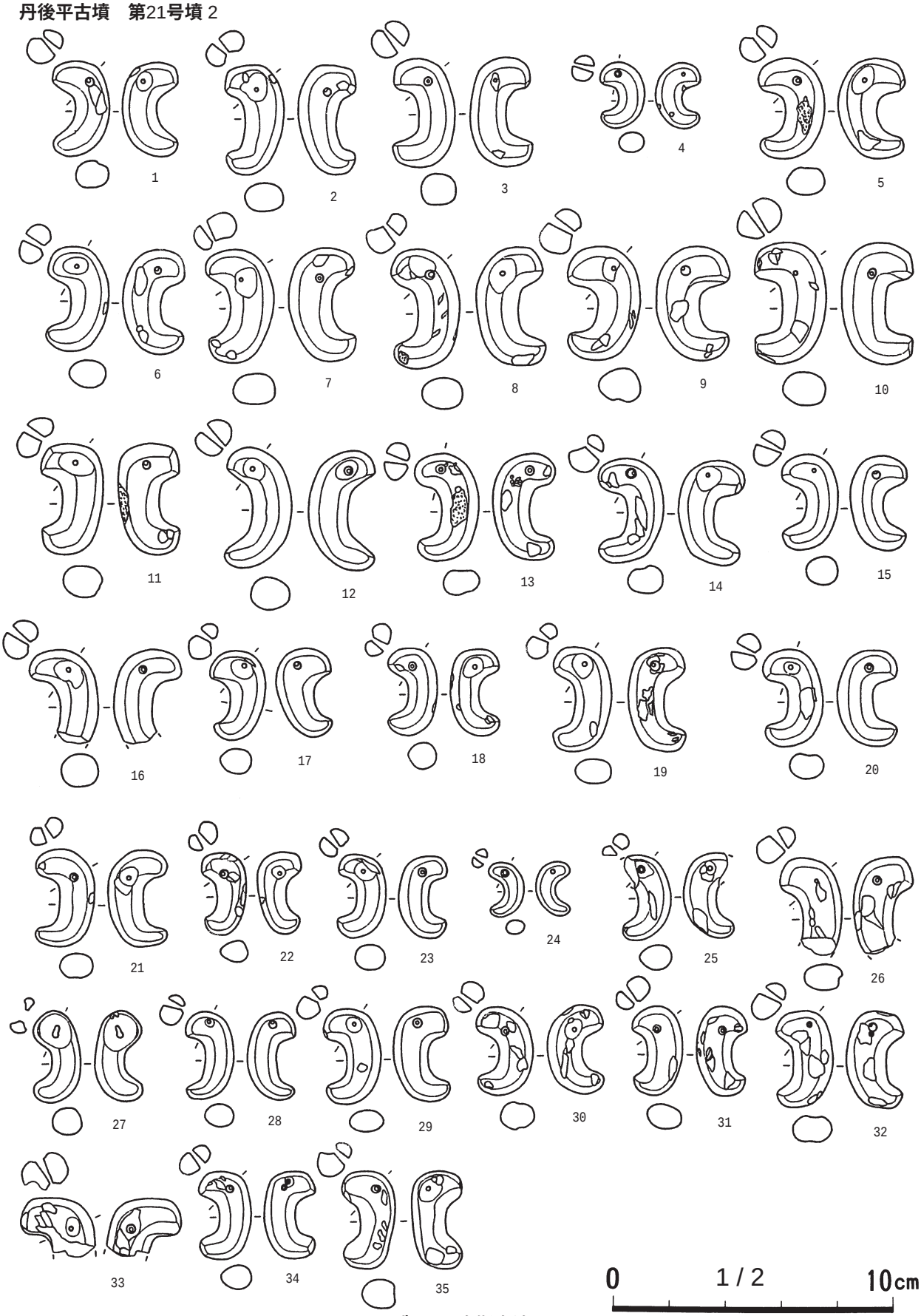


丹後平古墳　第21号墳 1



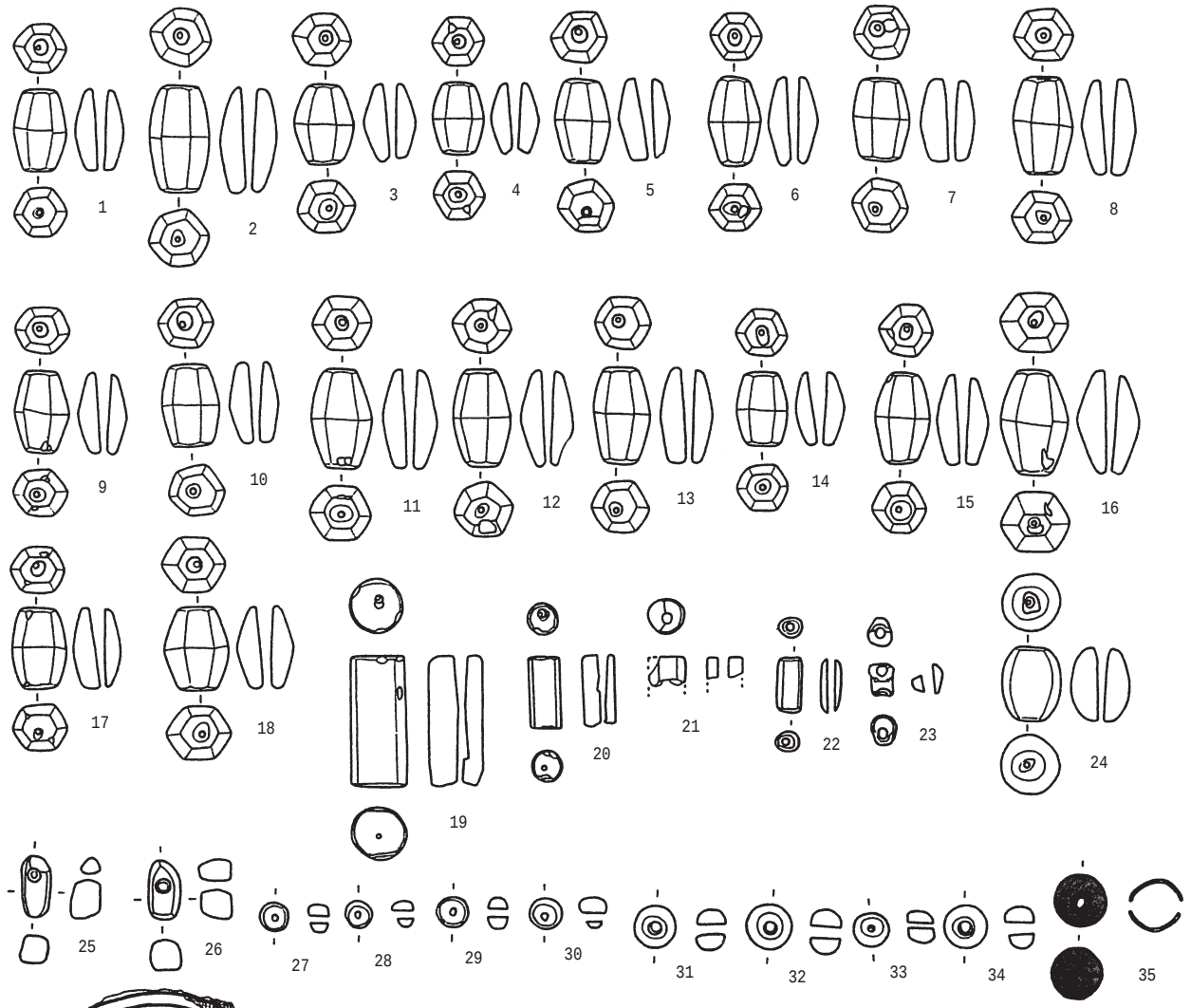
図版 8　末期古墳 6

丹後平古墳　第21号墳 2

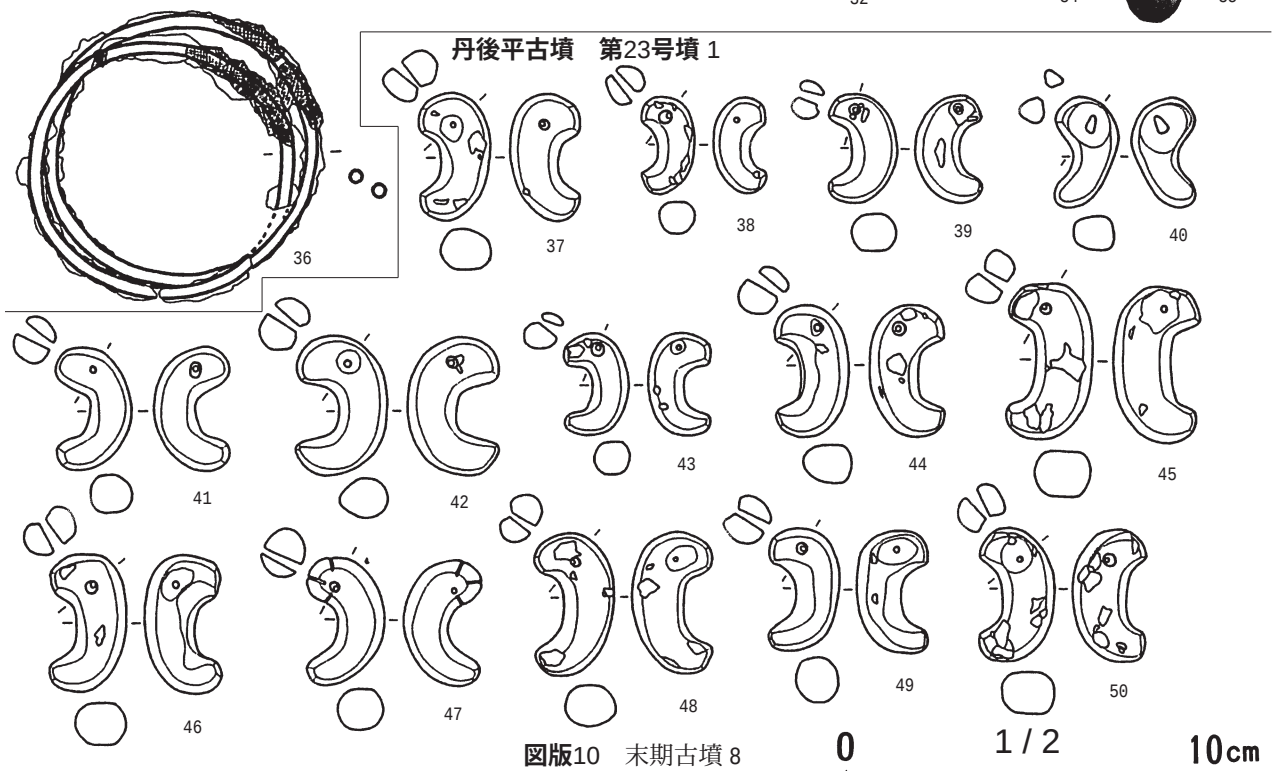


図版 9　末期古墳 7

丹後平古墳　第21号墳 3



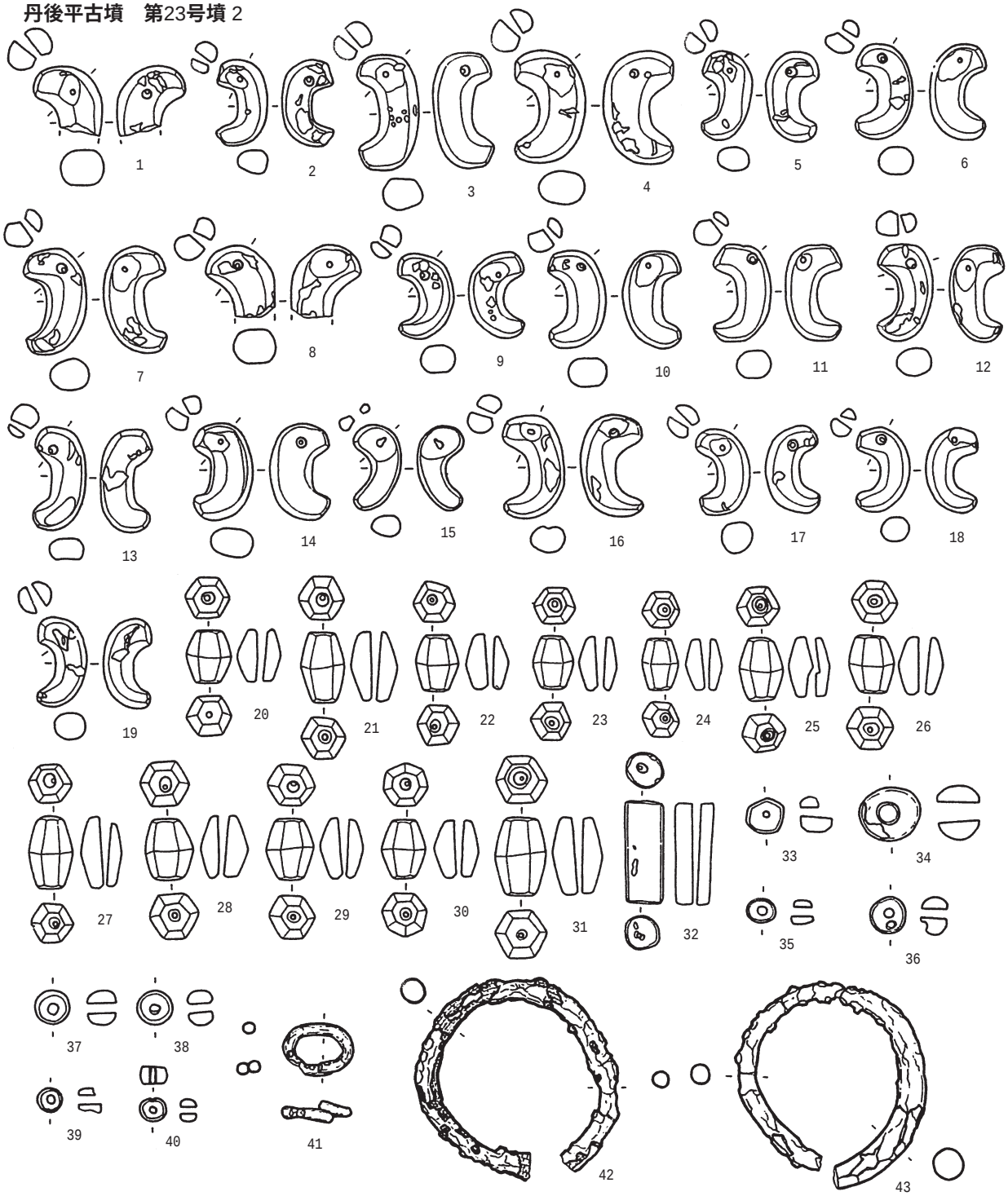
丹後平古墳　第23号墳 1



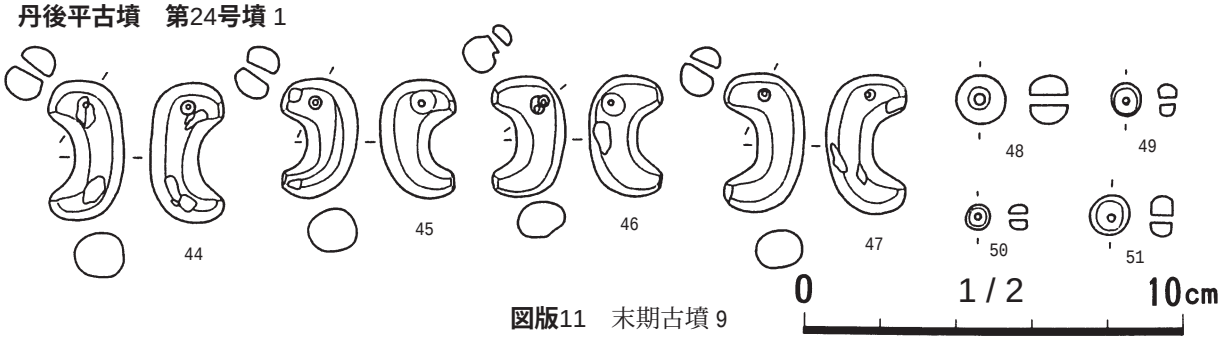
図版10　末期古墳 8

0　1/2　10cm

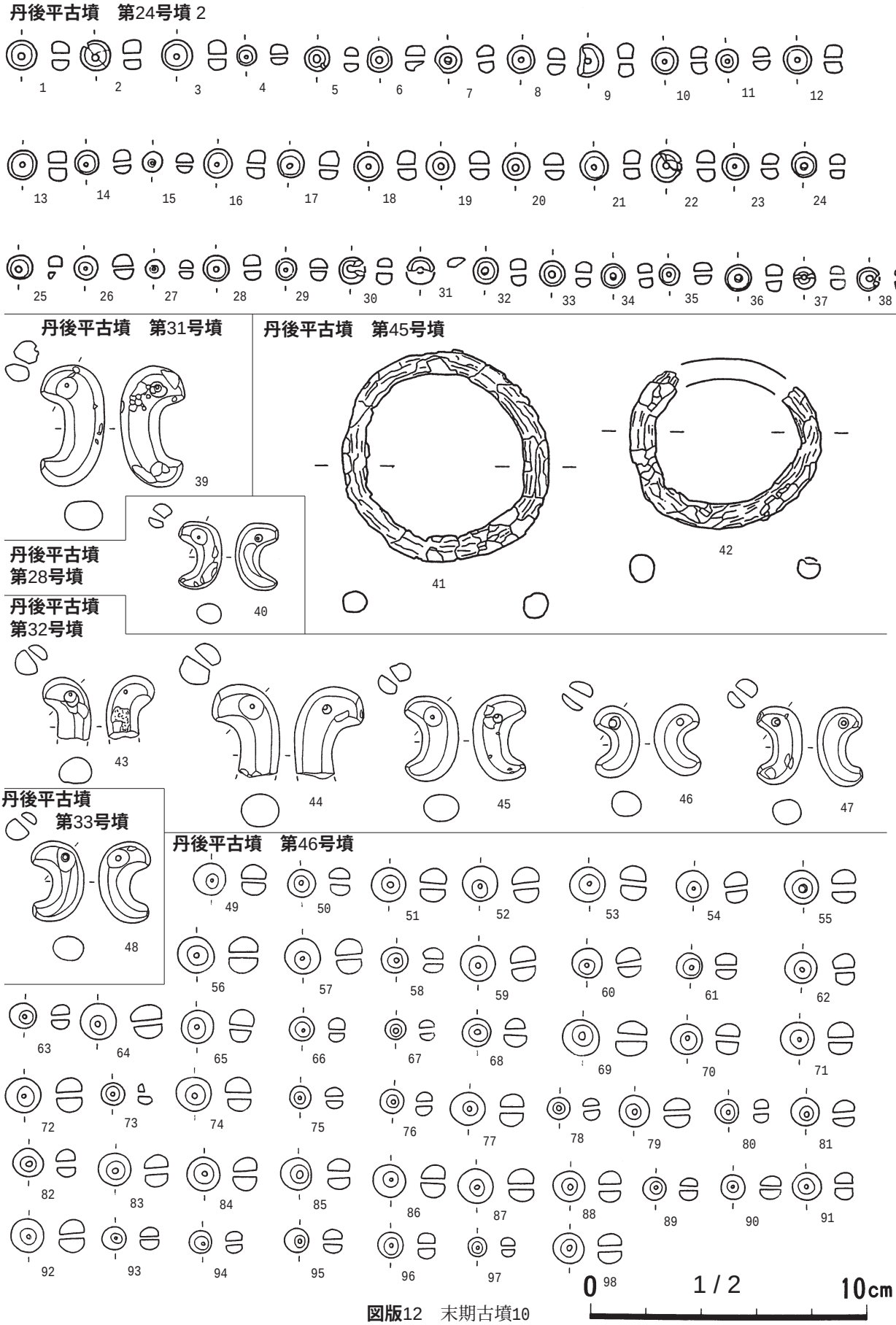
丹後平古墳　第23号墳 2



丹後平古墳　第24号墳 1

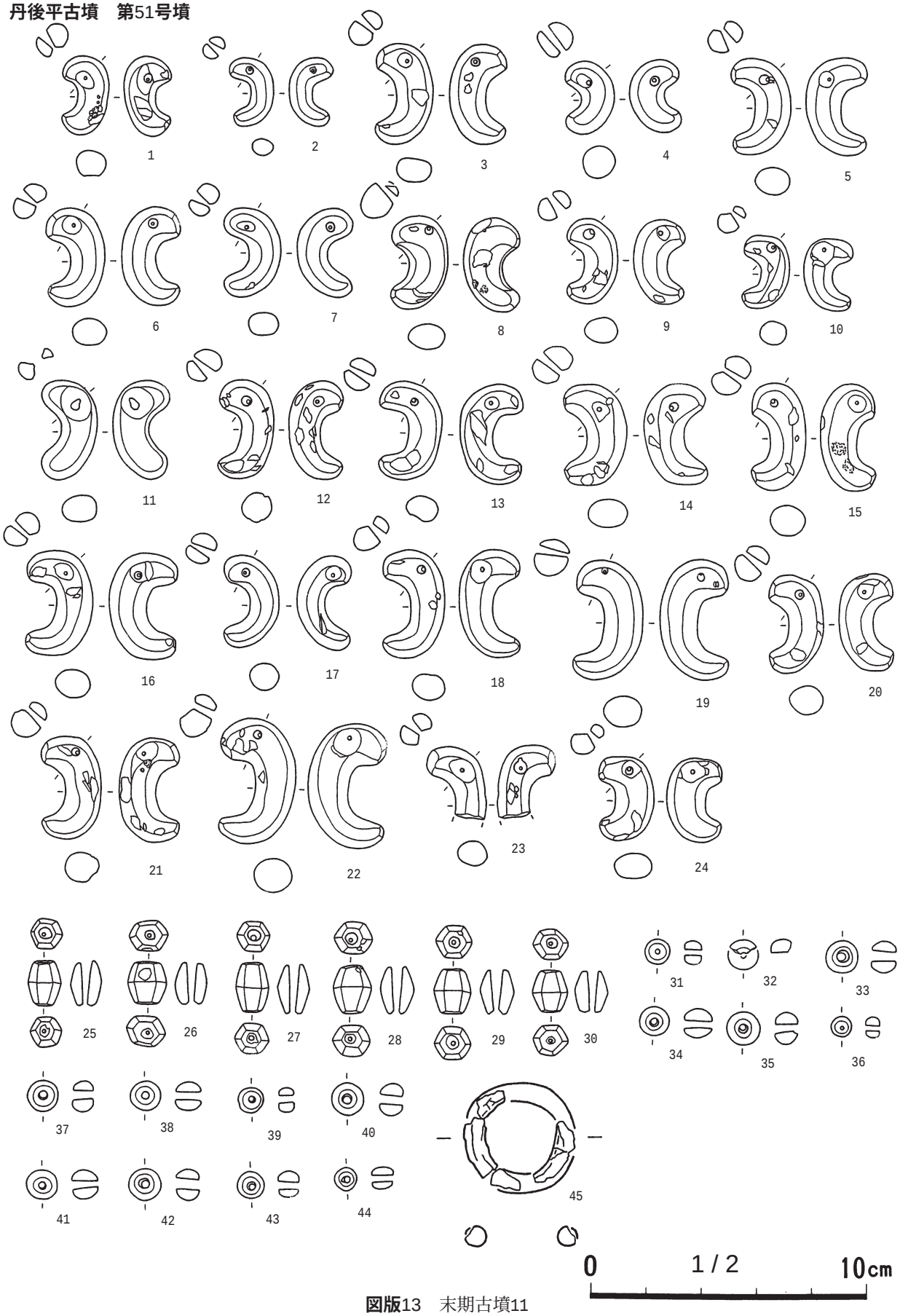


図版11　末期古墳 9

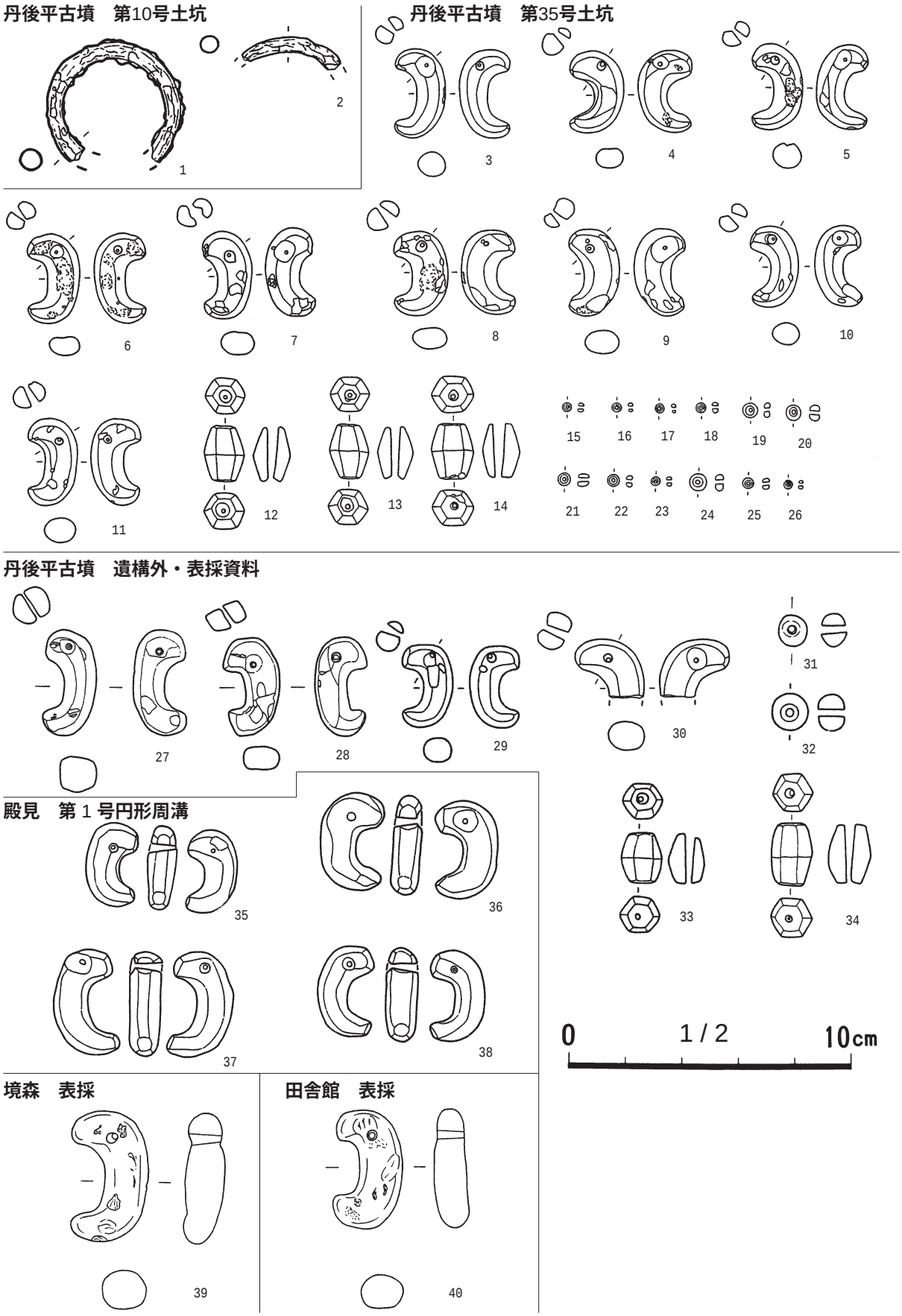

丹後平古墳　第24号墳 2
丹後平古墳　第31号墳
丹後平古墳　第45号墳
丹後平古墳
第28号墳
丹後平古墳
第32号墳
丹後平古墳
第33号墳
丹後平古墳　第46号墳
0
1 / 2
10cm

図版12　末期古墳10

丹後平古墳　第51号墳



図版13　末期古墳11


丹後平古墳　第10号土坑
丹後平古墳　第35号土坑
丹後平古墳　遺構外・表採資料
殿見　第１号円形周溝
境森　表採
田舎館　表採
0　1/2　10cm

図版14　末期古墳12

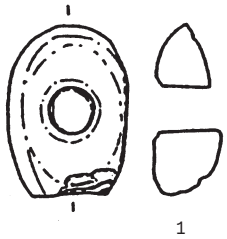
青森県における装身具の集成

奈良・平安時代編

石製装身具（南部地域）

上北地域

有孔石製品

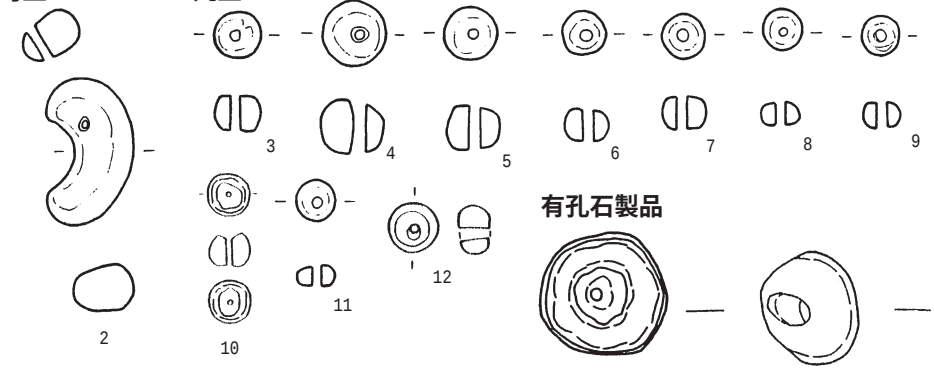


史跡七戸城跡北館

三八地域

勾玉

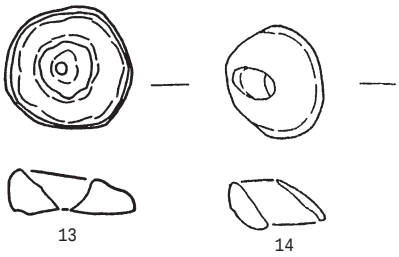
丸玉



2～10　市子林
11　田面木平（1）
12　岩ノ沢平

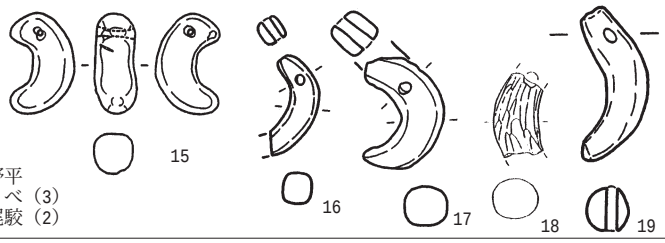
13～14　櫛引

有孔石製品



土製装身具（南部・上北地域）

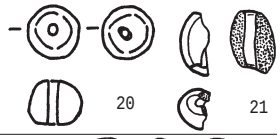
勾玉



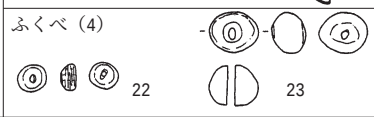
15～17　中野平
18　ふくべ（3）
19　上尾駮（2）

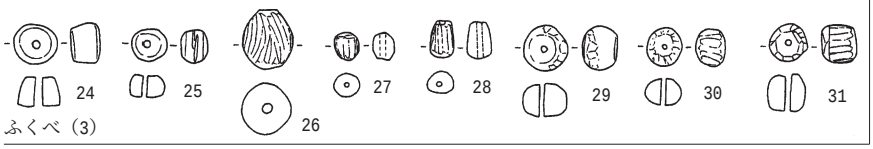
丸玉

向山（4）　平畑（3）



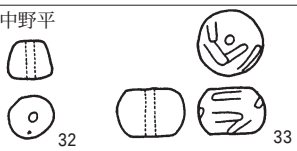
ふくべ（4）

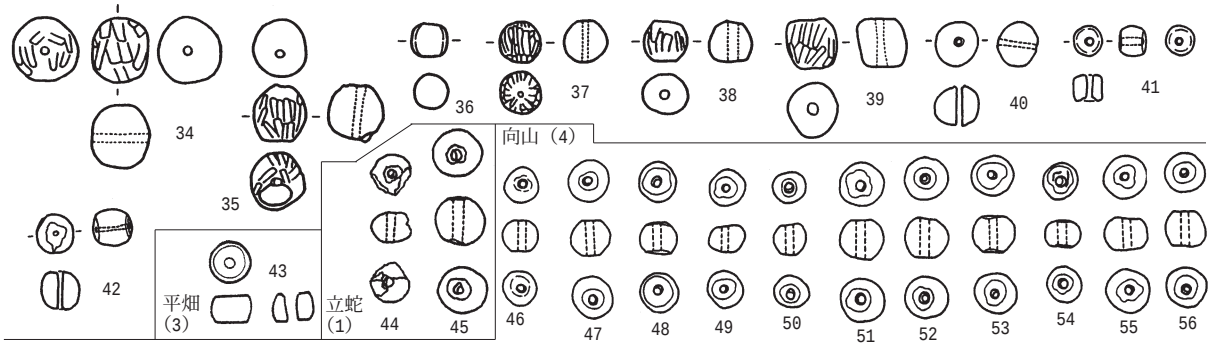




ふくべ（3）

中野平





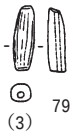
向山（4）

平畑（3）

立蛇（1）

発茶沢（1）

管玉

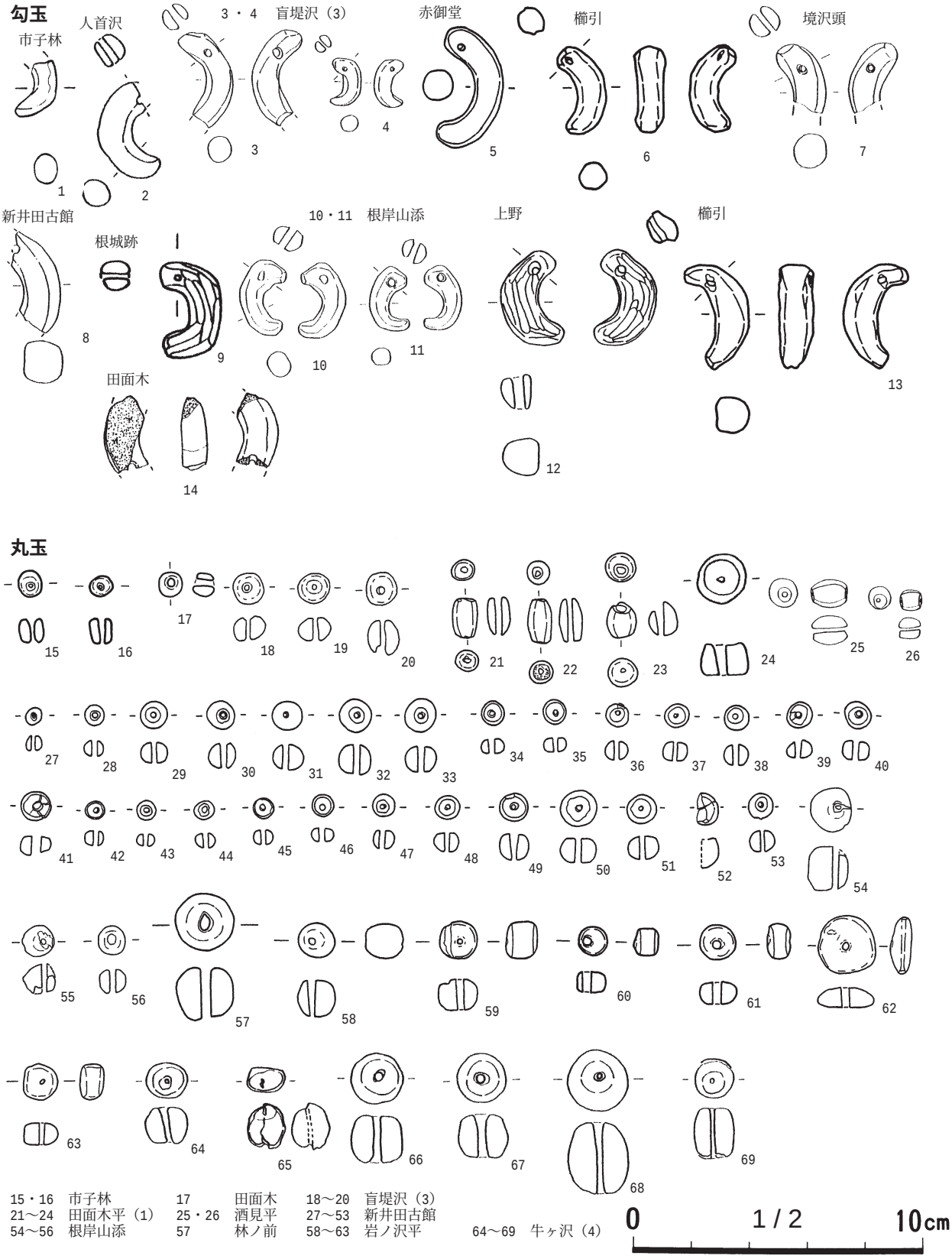


ふくべ（3）

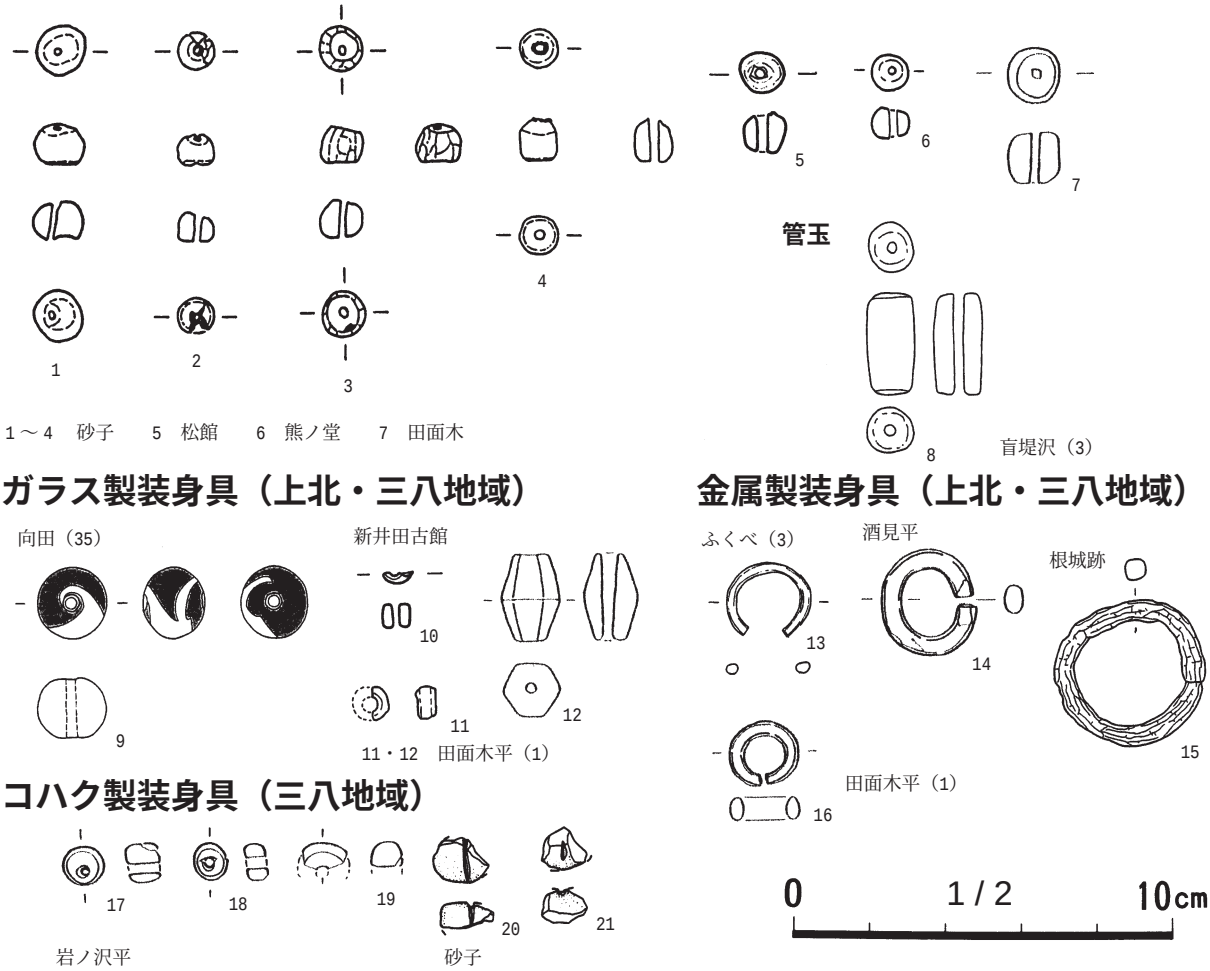
0　1/2　10cm

図版15　古代１（南部地域１）

土製装身具（南部・三八地域）

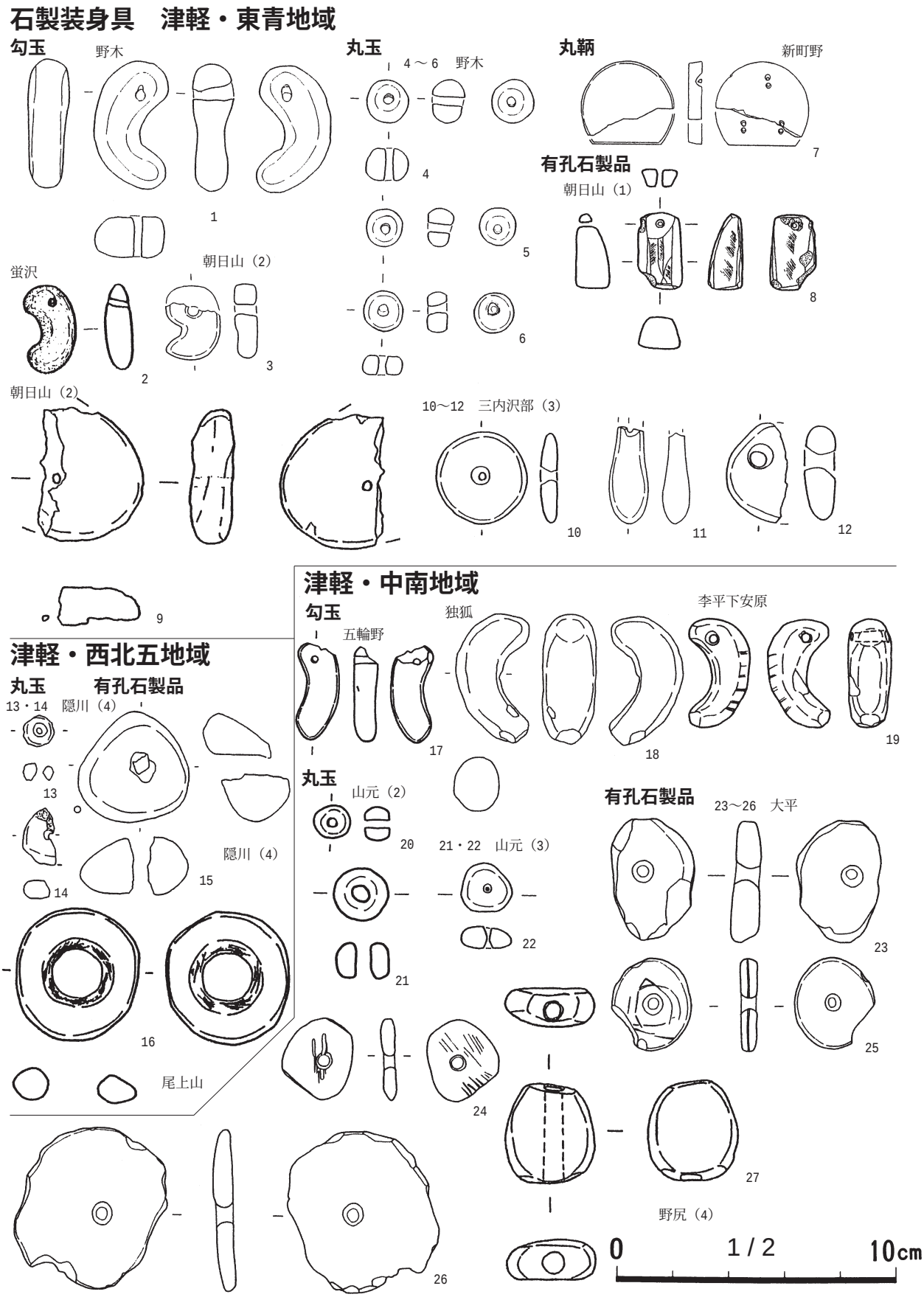


図版16　古代２（南部地域２）



1～4　砂子　5　松館　6　熊ノ堂　7　田面木

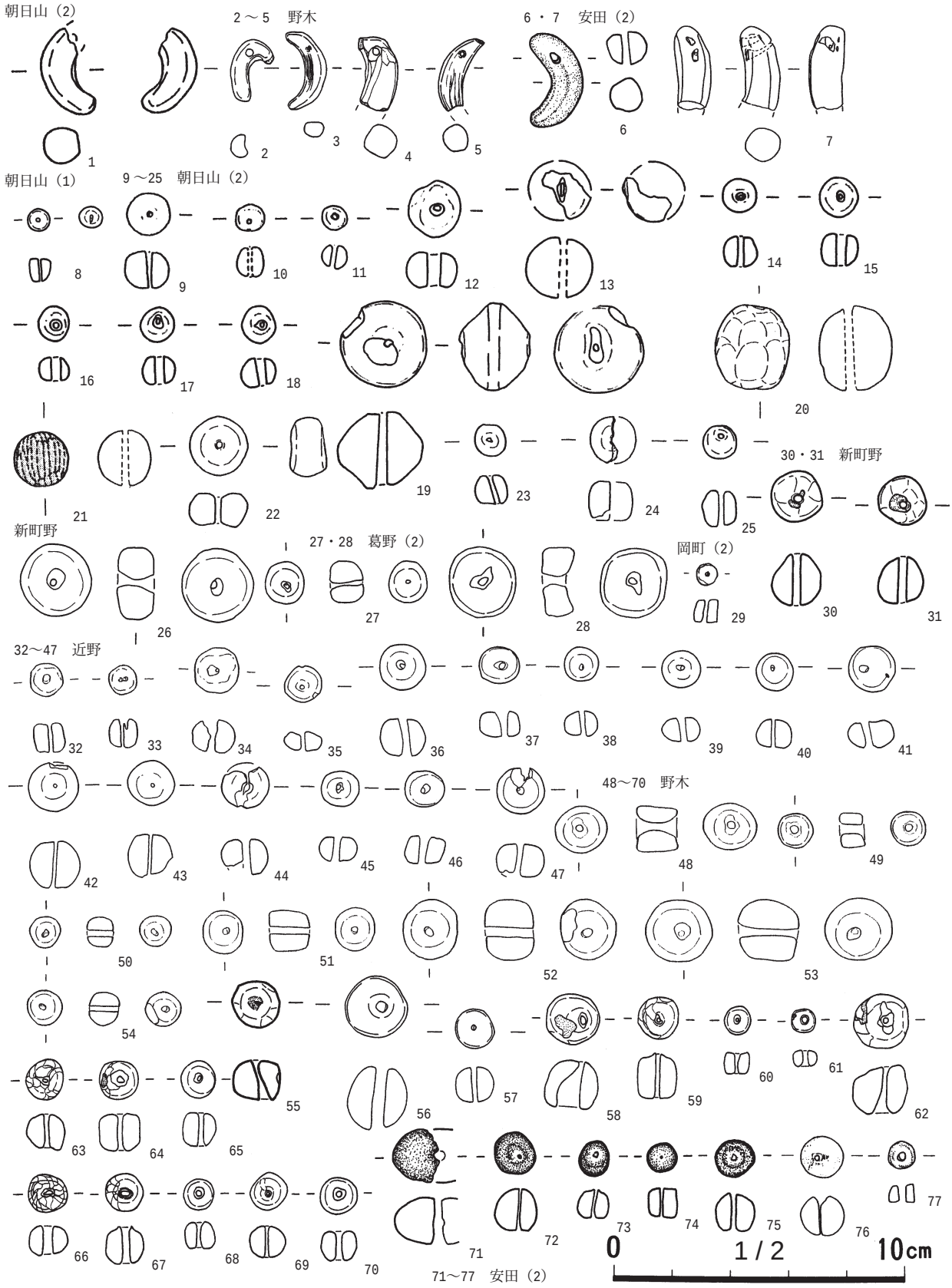
図版17　古代３（南部地域３）



図版18　古代４（津軽地域１）

古代土製装身具（津軽・東青地域）

勾玉



図版19　古代５（津軽地域２）

土製装身具　津軽・東青地域

丸玉

有孔土製品

1～6　安田（2）

津軽・西北五地域

勾玉

管玉

7～8　隠川（12）

隠川（2）

丸玉

10　八重菊（1）
26～41　隠川（12）
43～71　隠川（2）
74　久米川
75　稲元
11～25　隠川（4）
42　杢沢
72・73　外馬屋前田

津軽・中南地域

勾玉

78・79　李平下安原

高屋敷館

永野

76・77　宇田野（2）

山元（2）

山元（3）

丸玉

早稲田

小栗山館

82～84　野尻（1）

野尻（4）

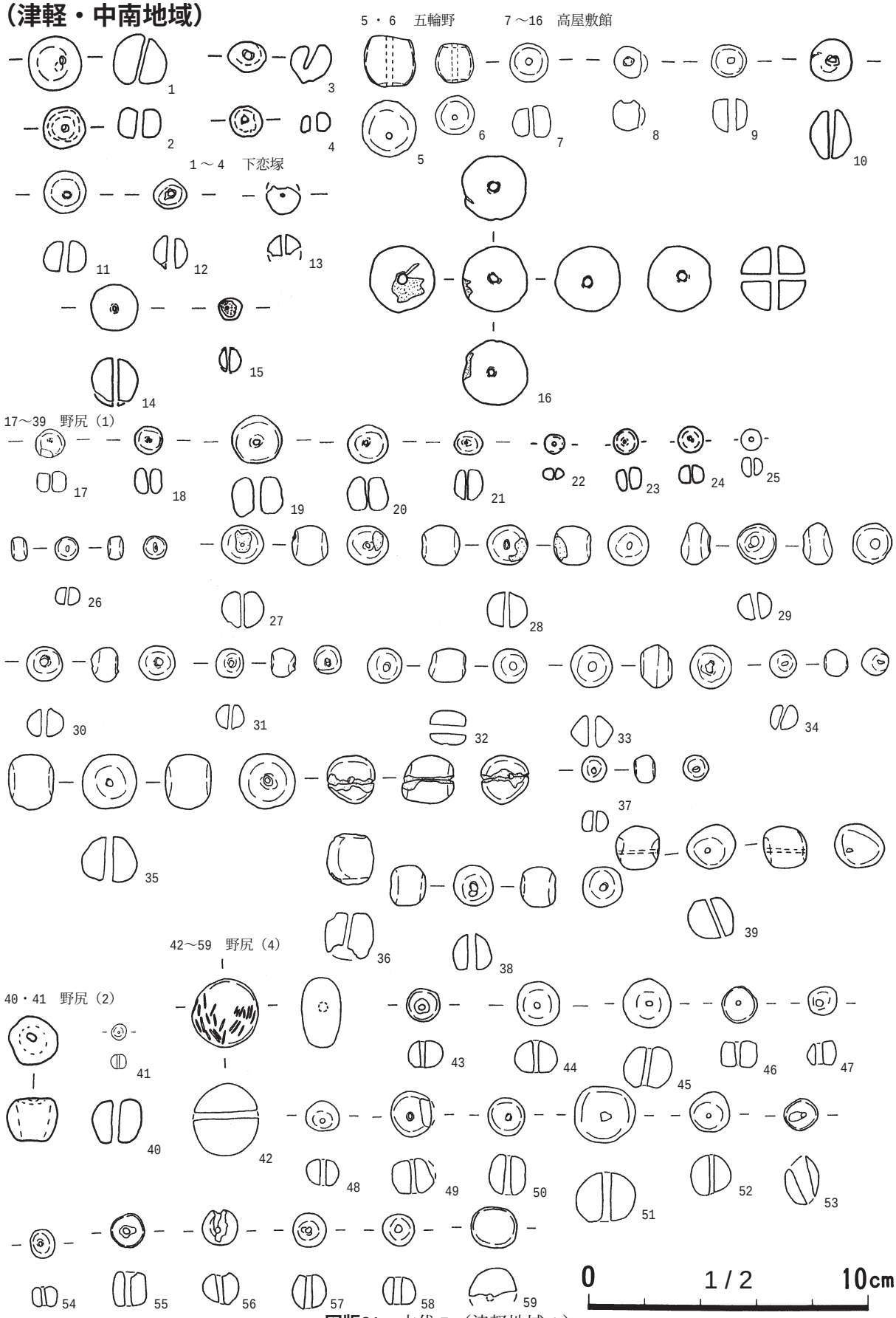
宮館

小友館

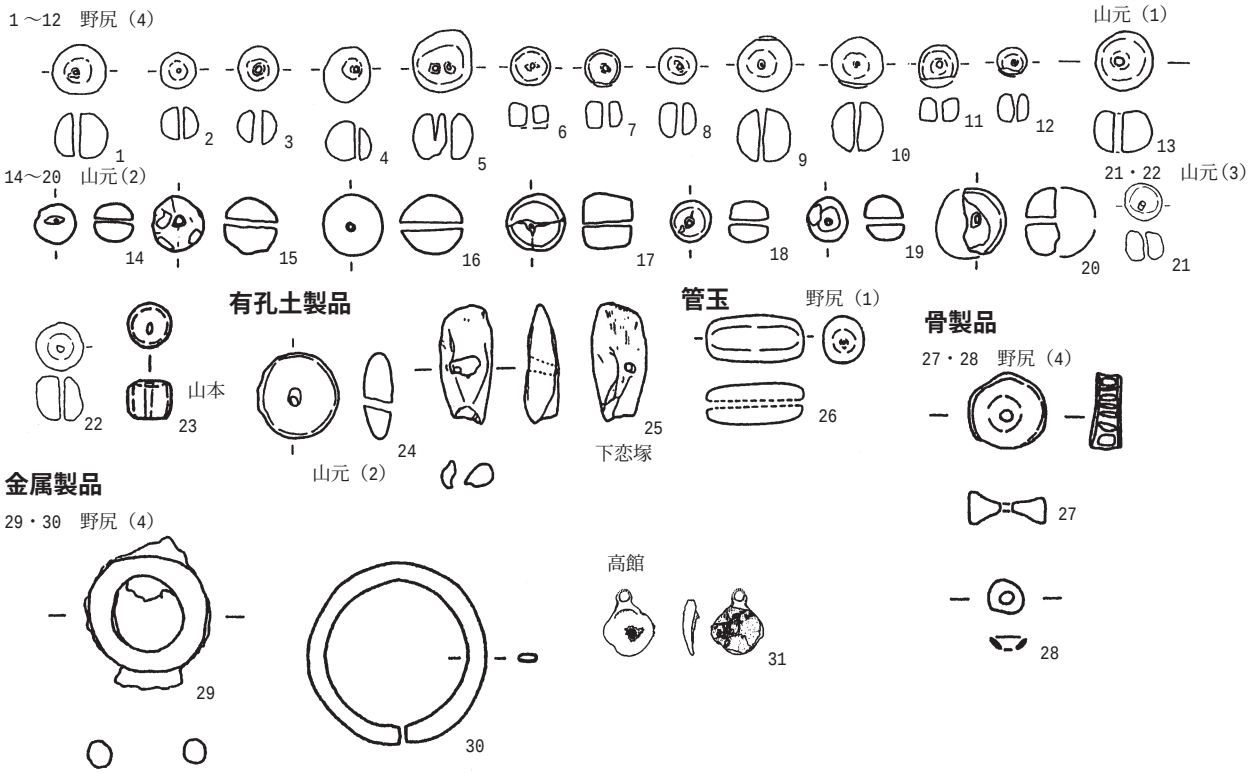
0　1/2　10cm

図版20　古代6（津軽地域3）

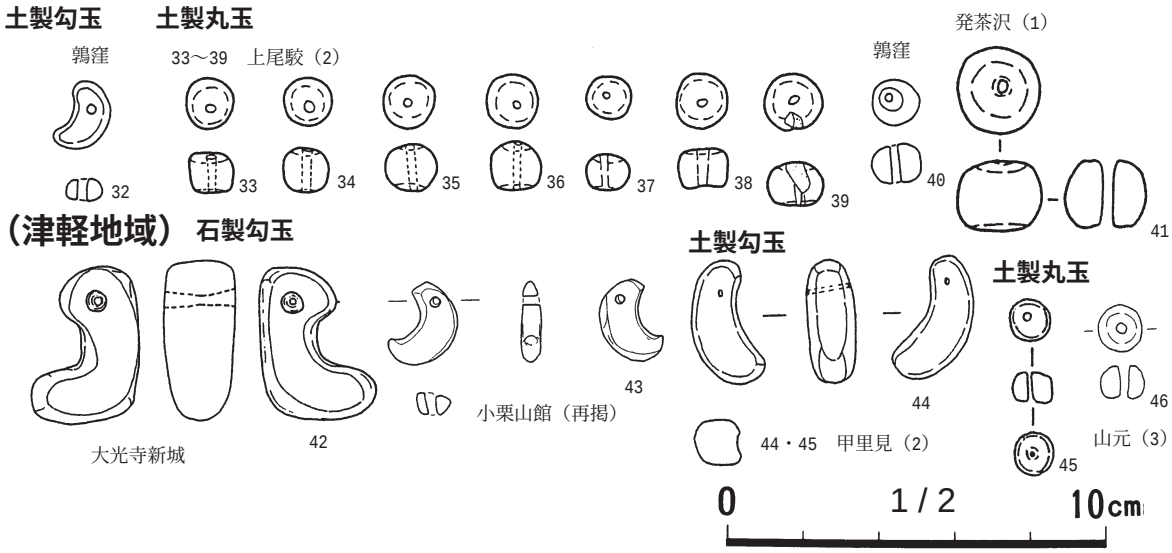
（津軽・中南地域）



図版21　古代７（津軽地域４）



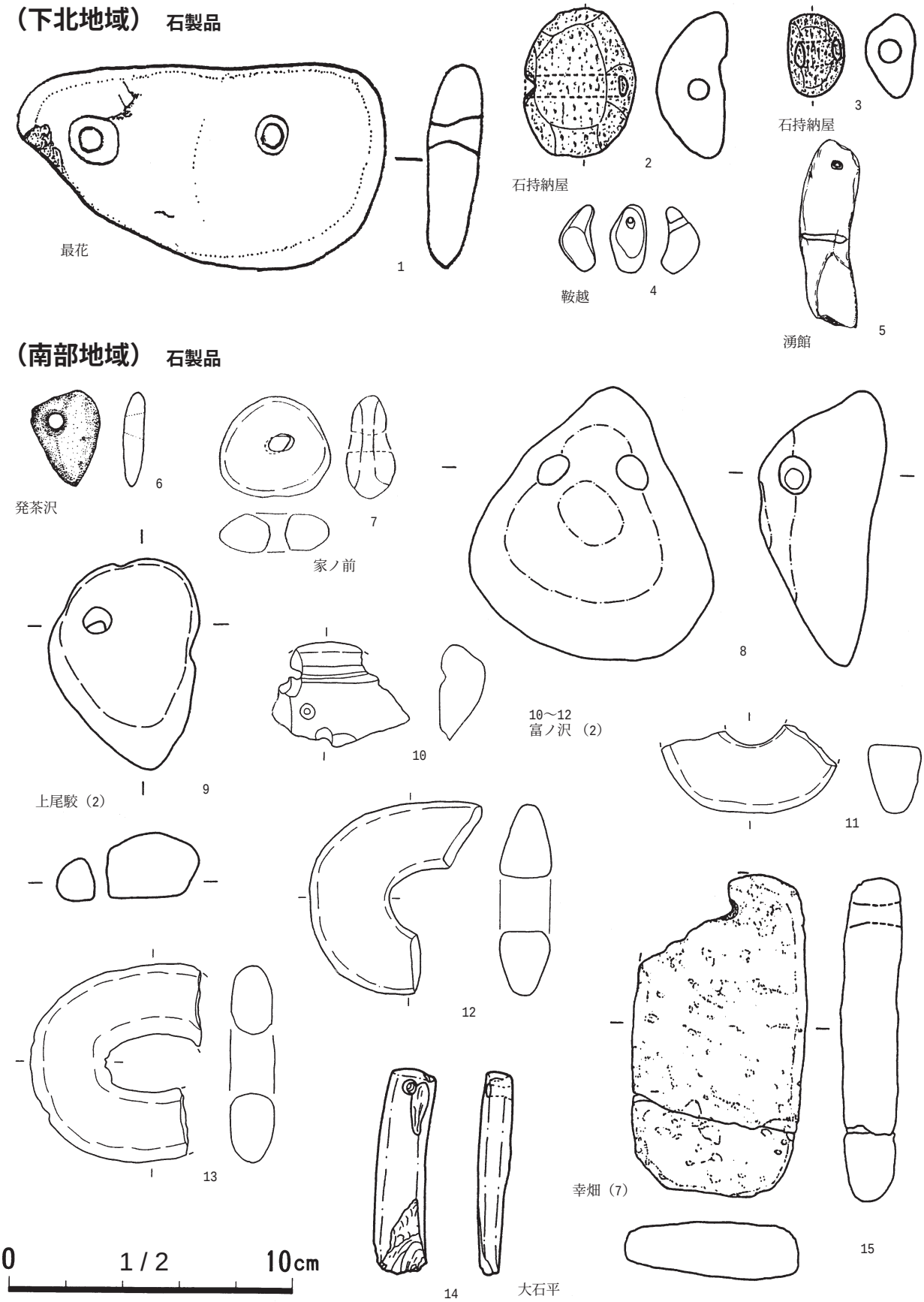
補遺（南部地域）



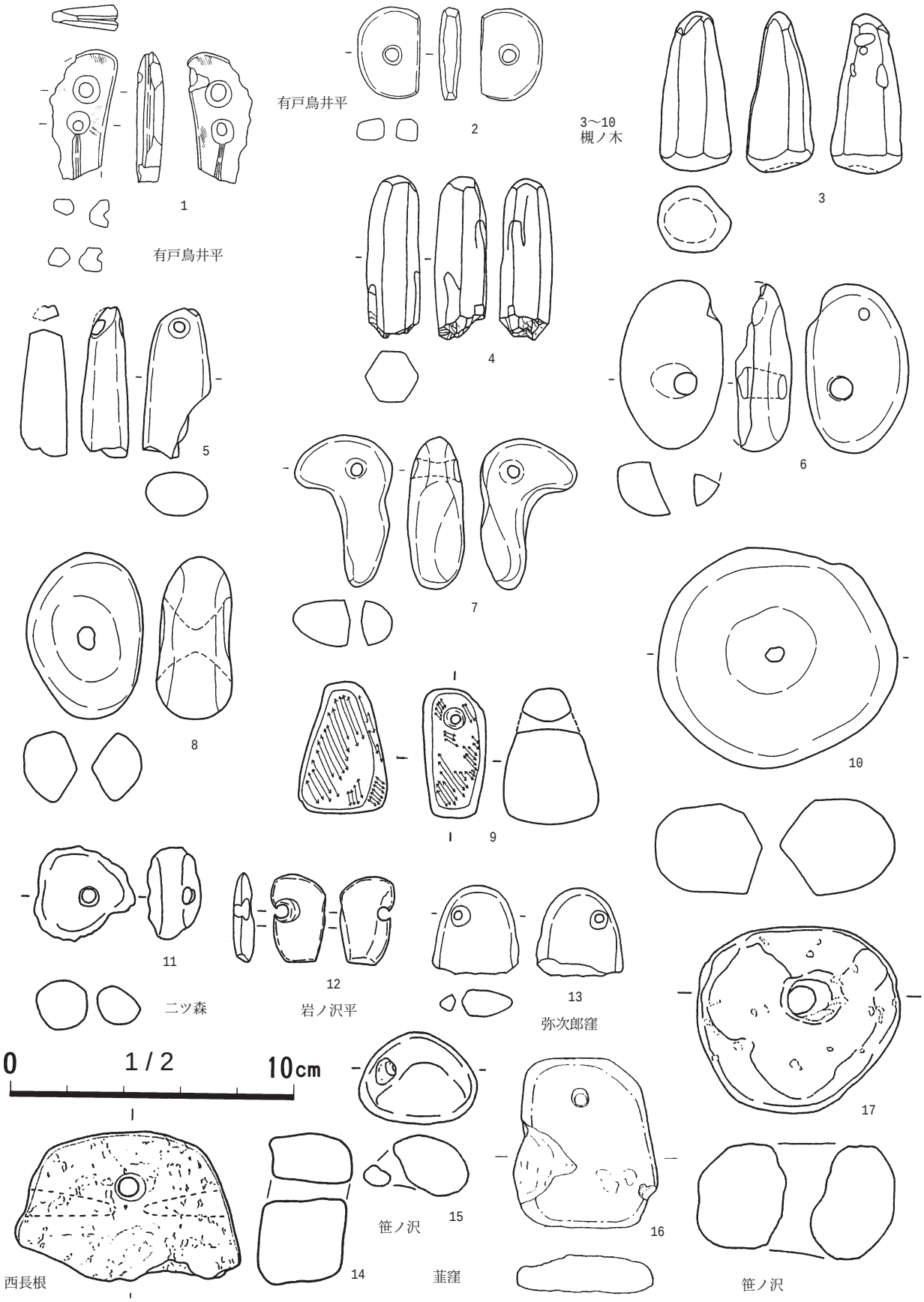
図版22　古代８（津軽地域５・補遺）

青森県における装身具の集成

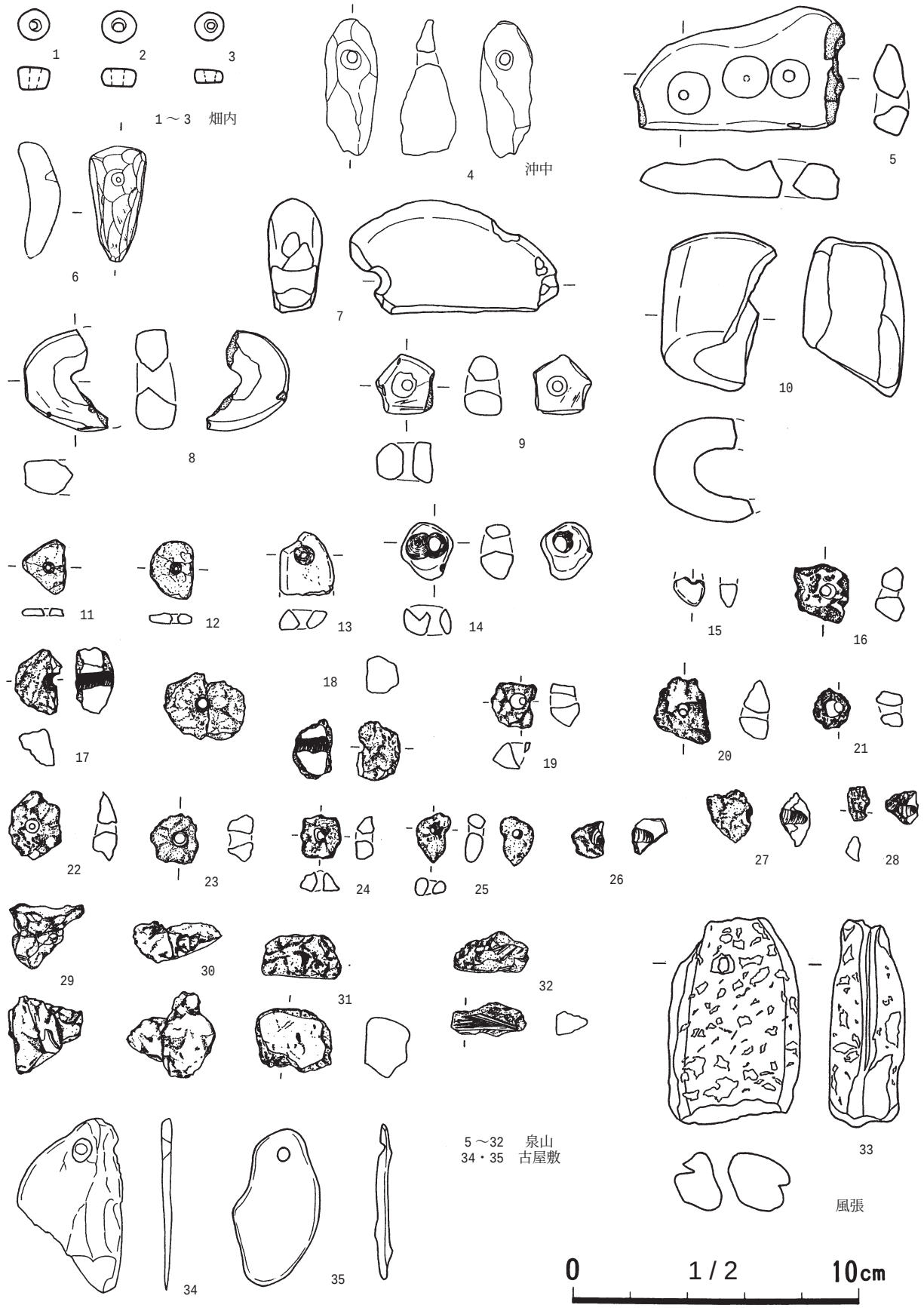
縄文時代追加編



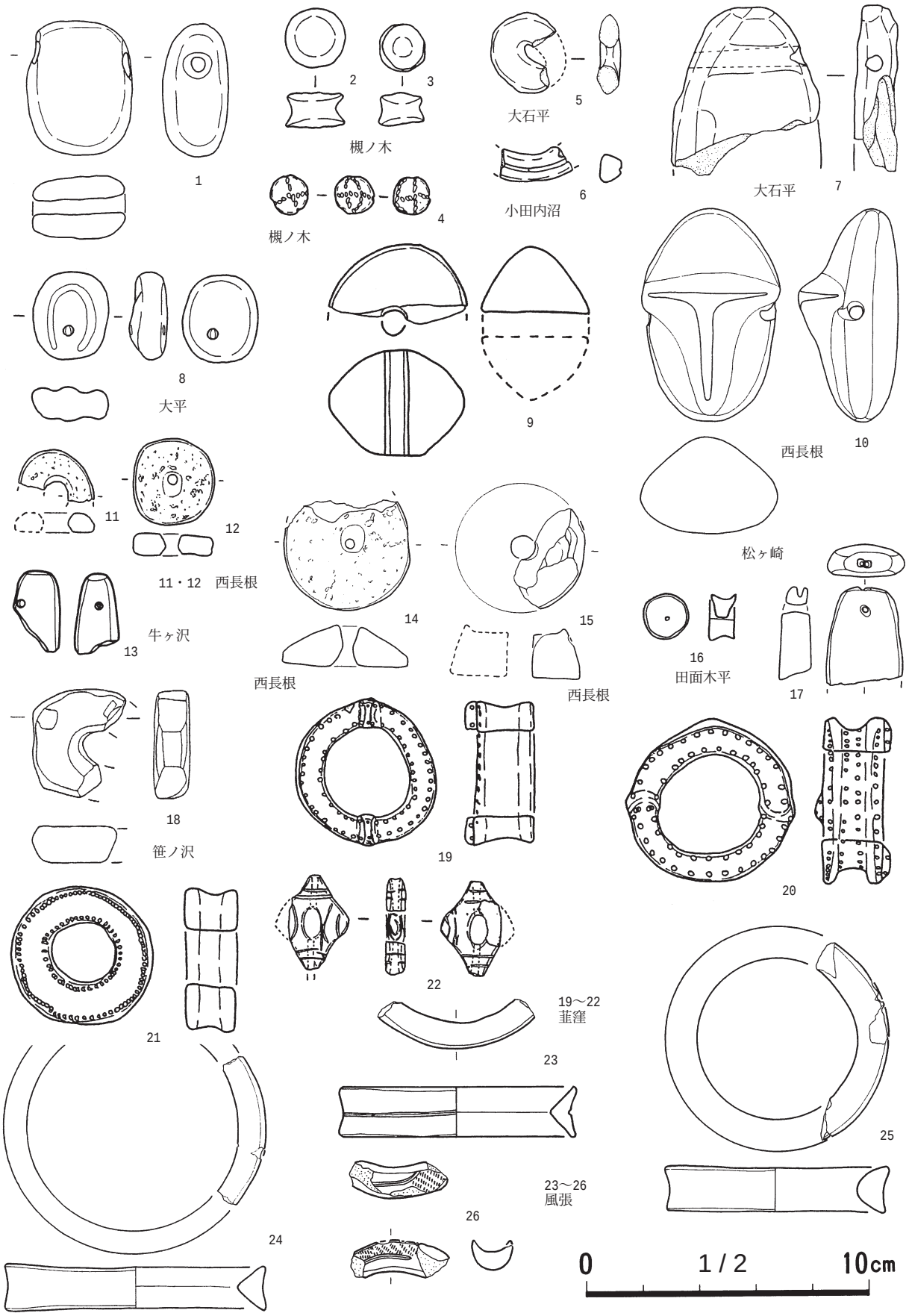
図版23　縄文時代追加１（下北地域５・南部地域29）



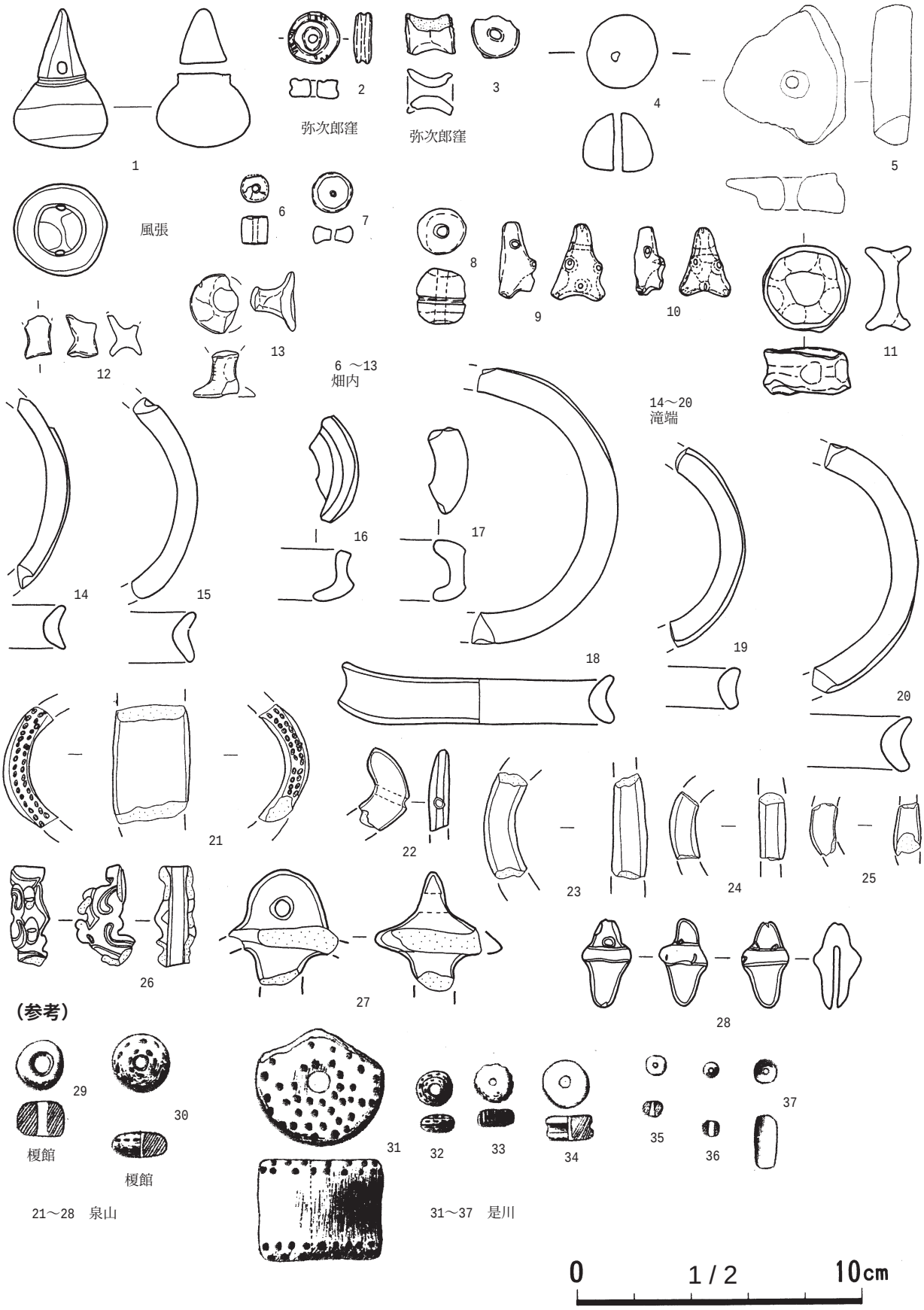
図版24　縄文時代追加２（南部地域30）



図版25　縄文時代追加３（南部地域31）

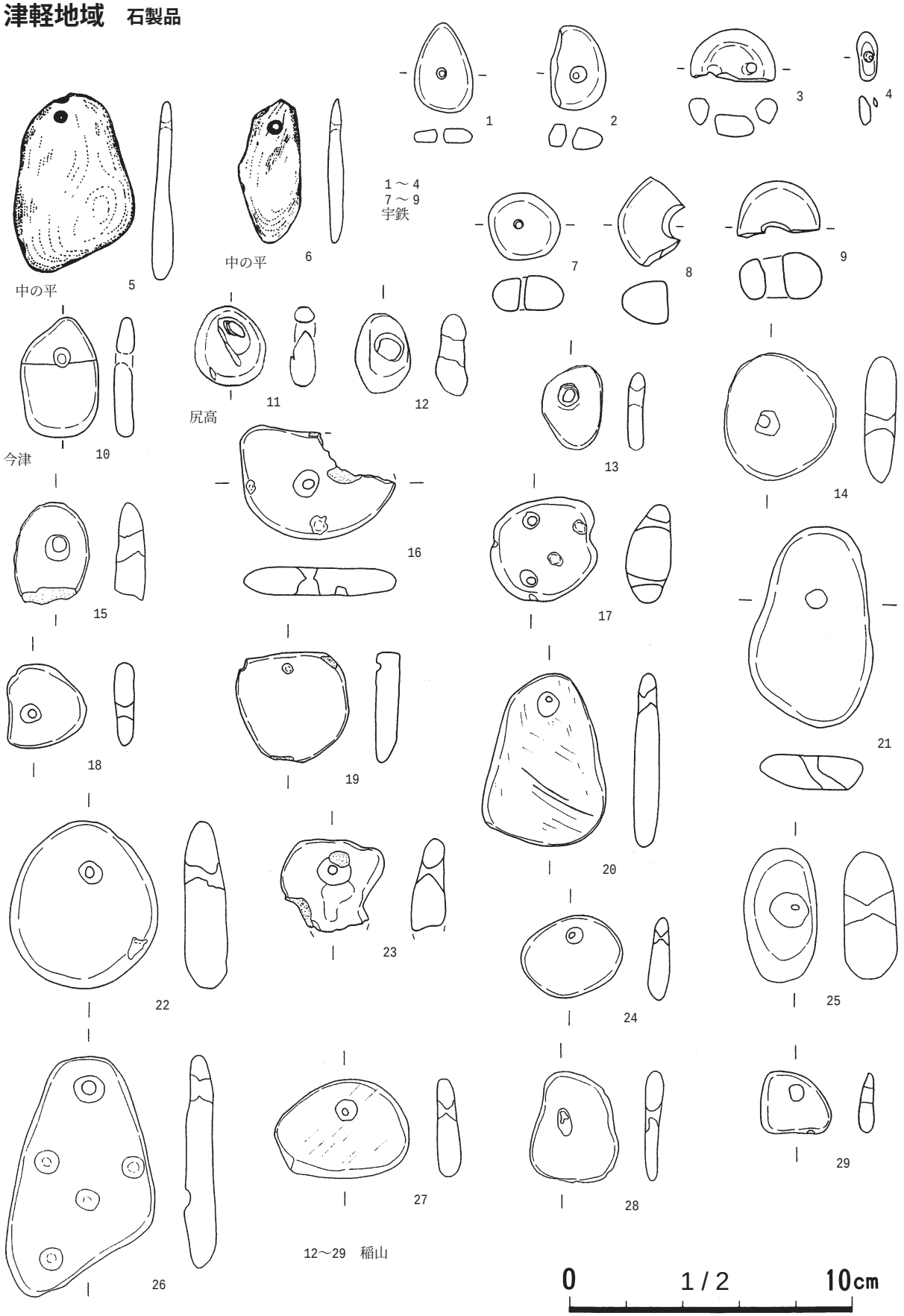


図版26　縄文時代追加４（南部地域32）

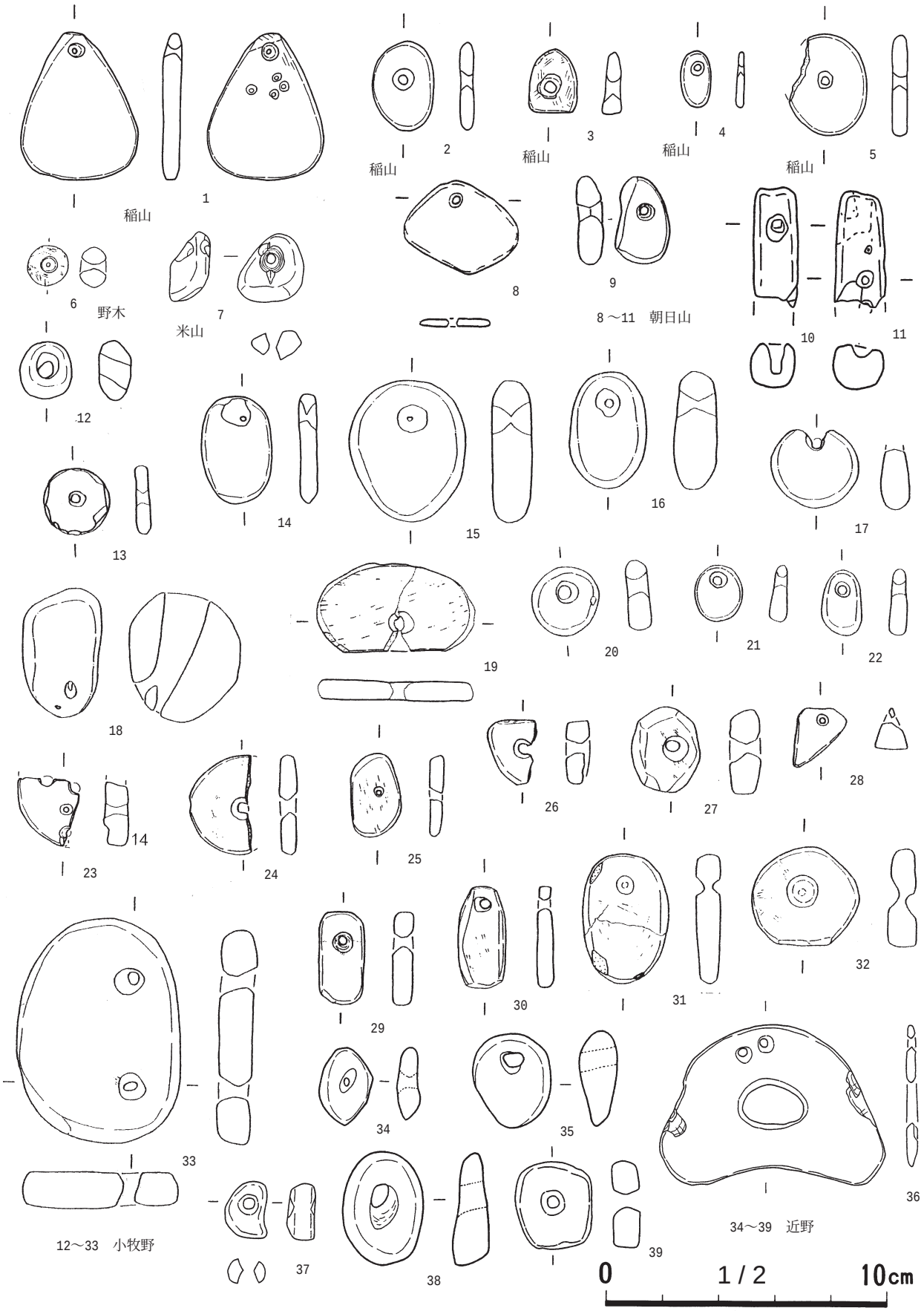


図版27　縄文時代追加５（南部地域33）

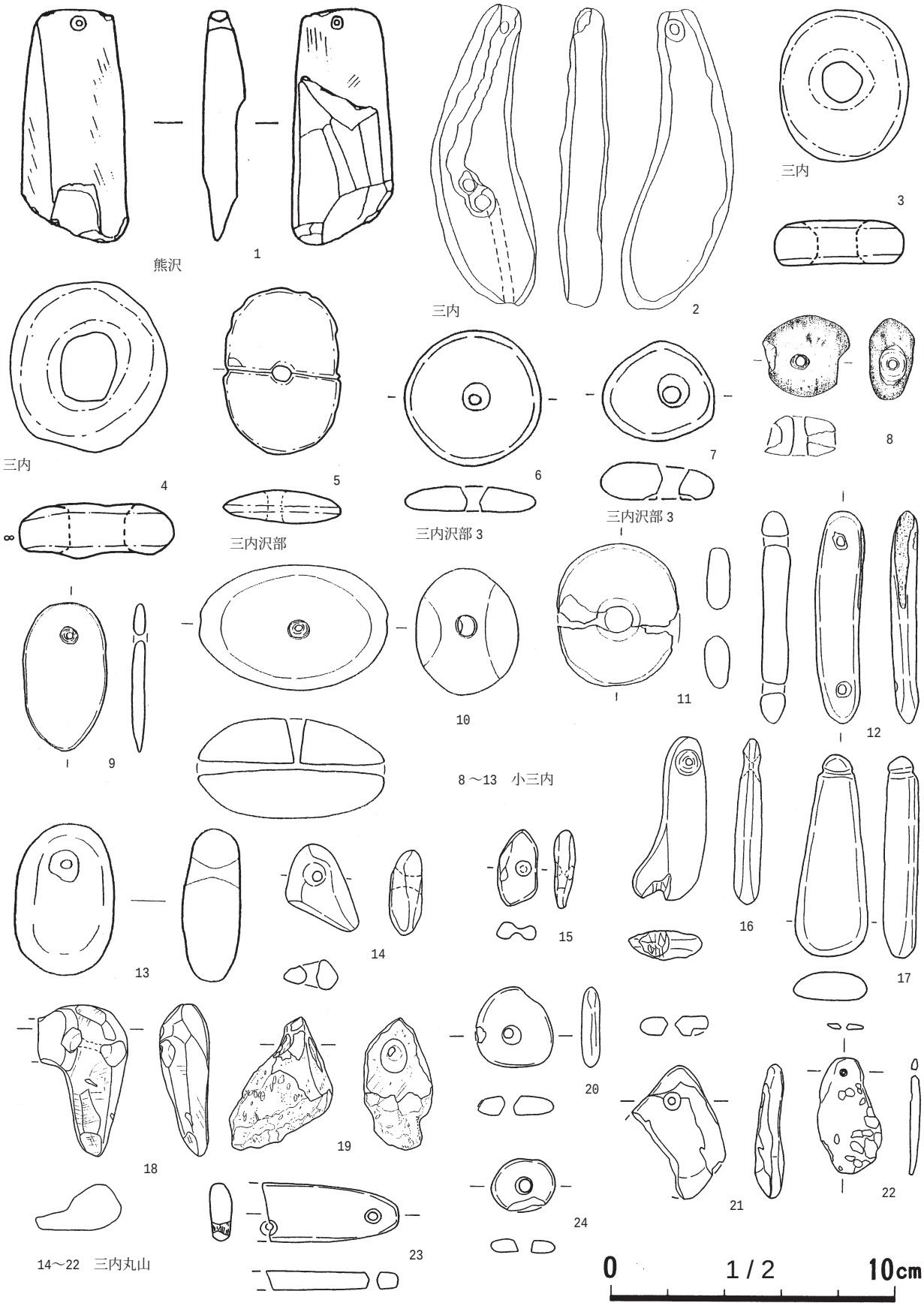
津軽地域　石製品



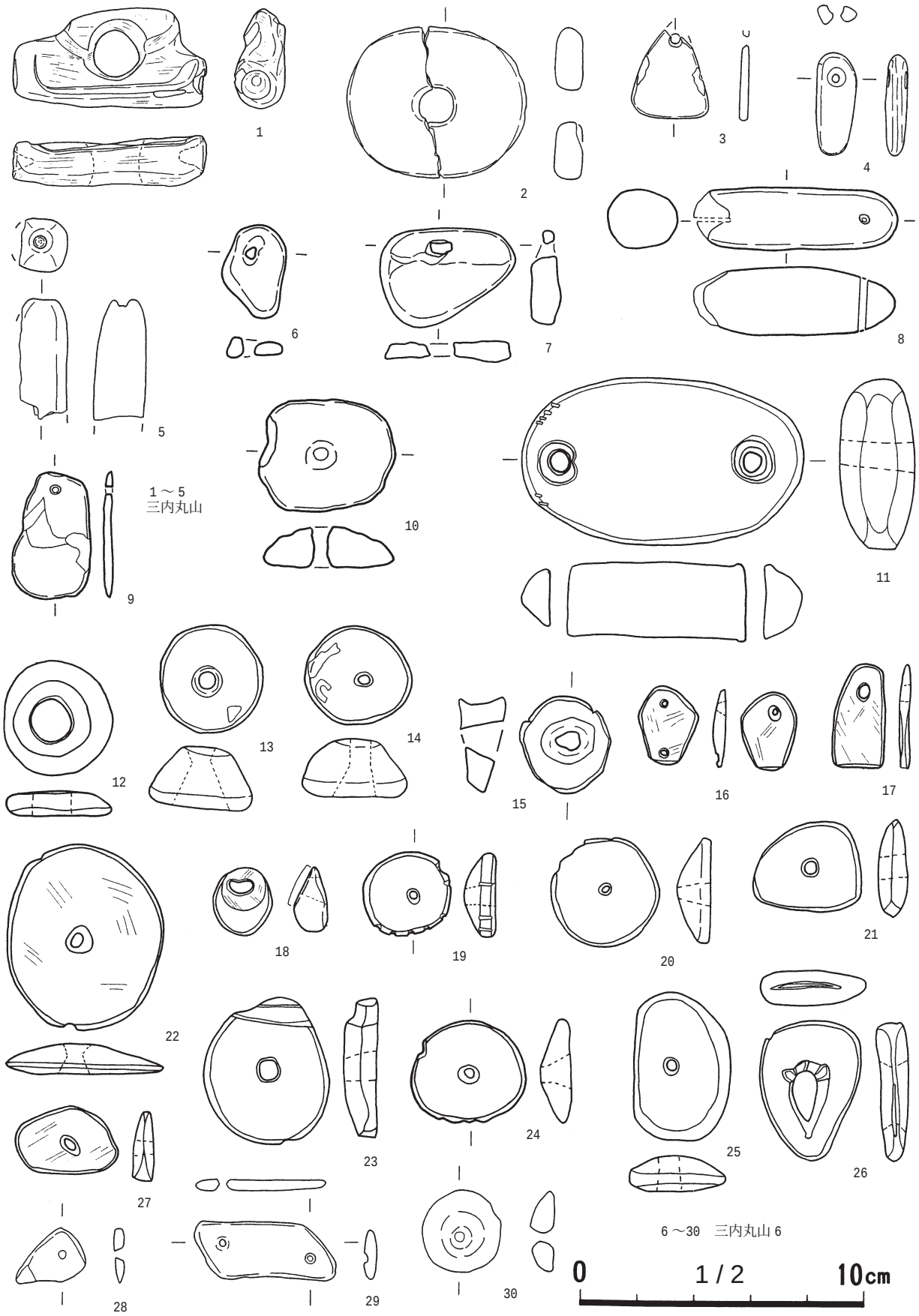
図版28　縄文時代追加６（津軽地域21）



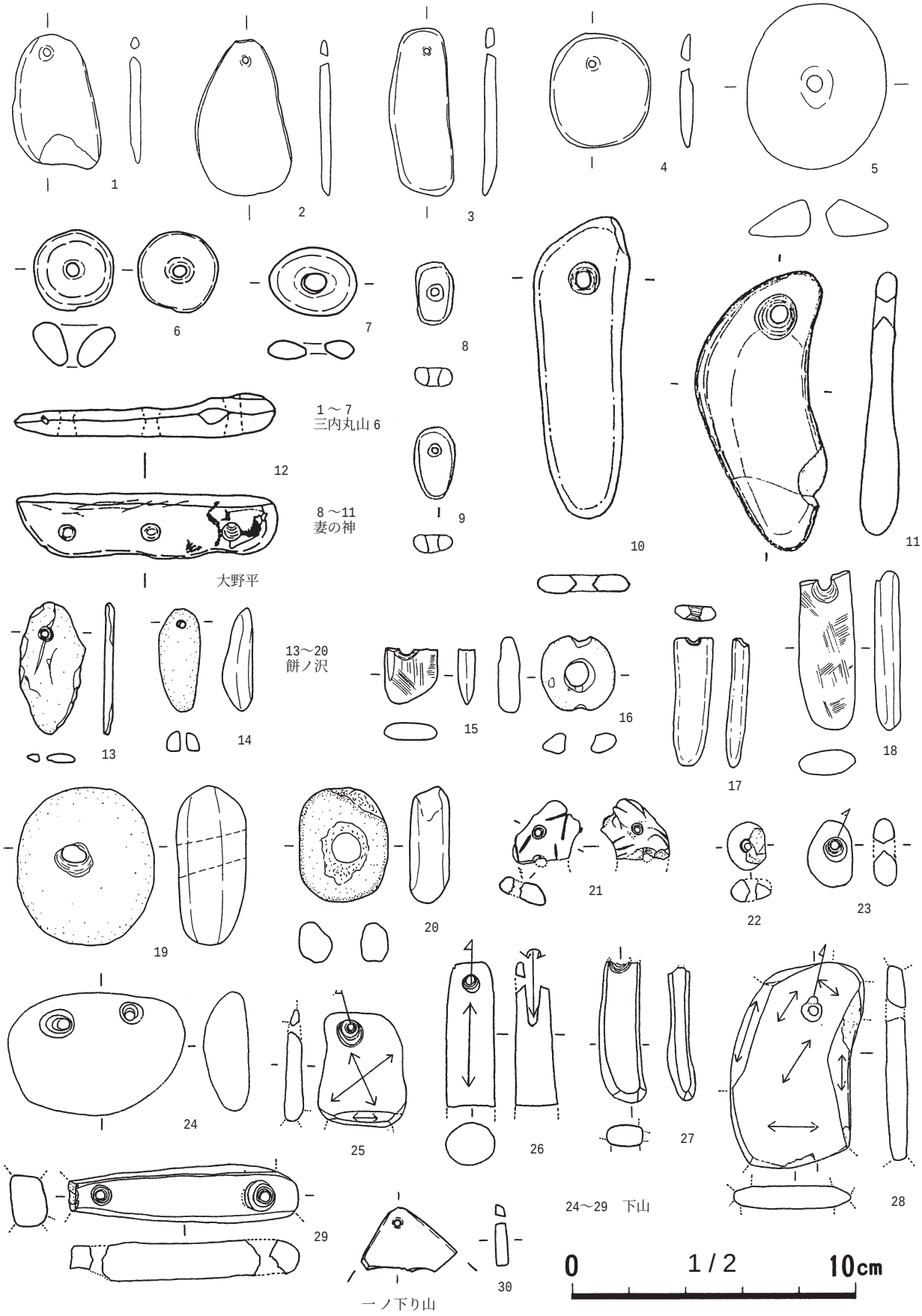
図版29　縄文時代追加７（津軽地域22）



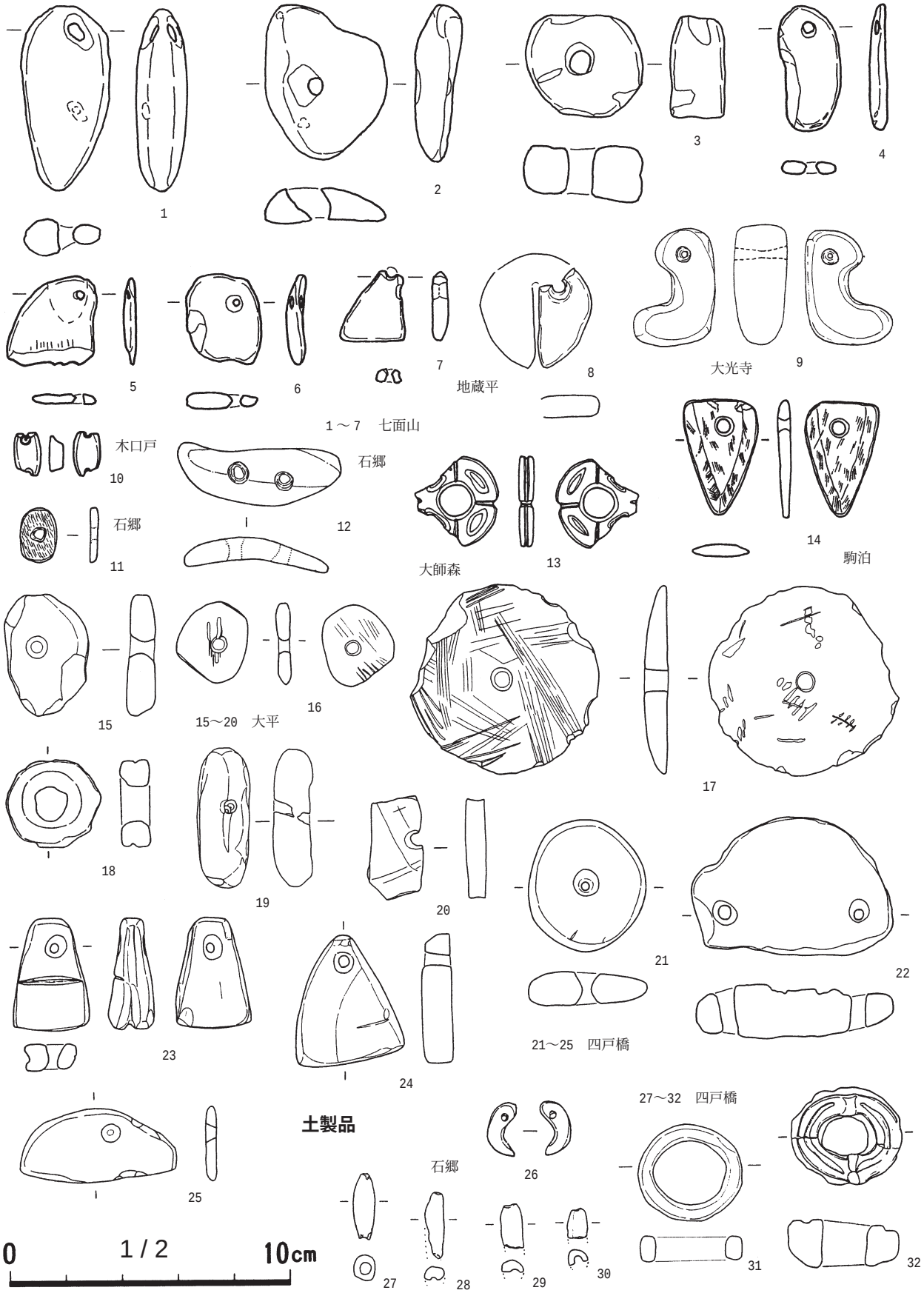
図版30　縄文時代追加８（津軽地域23）



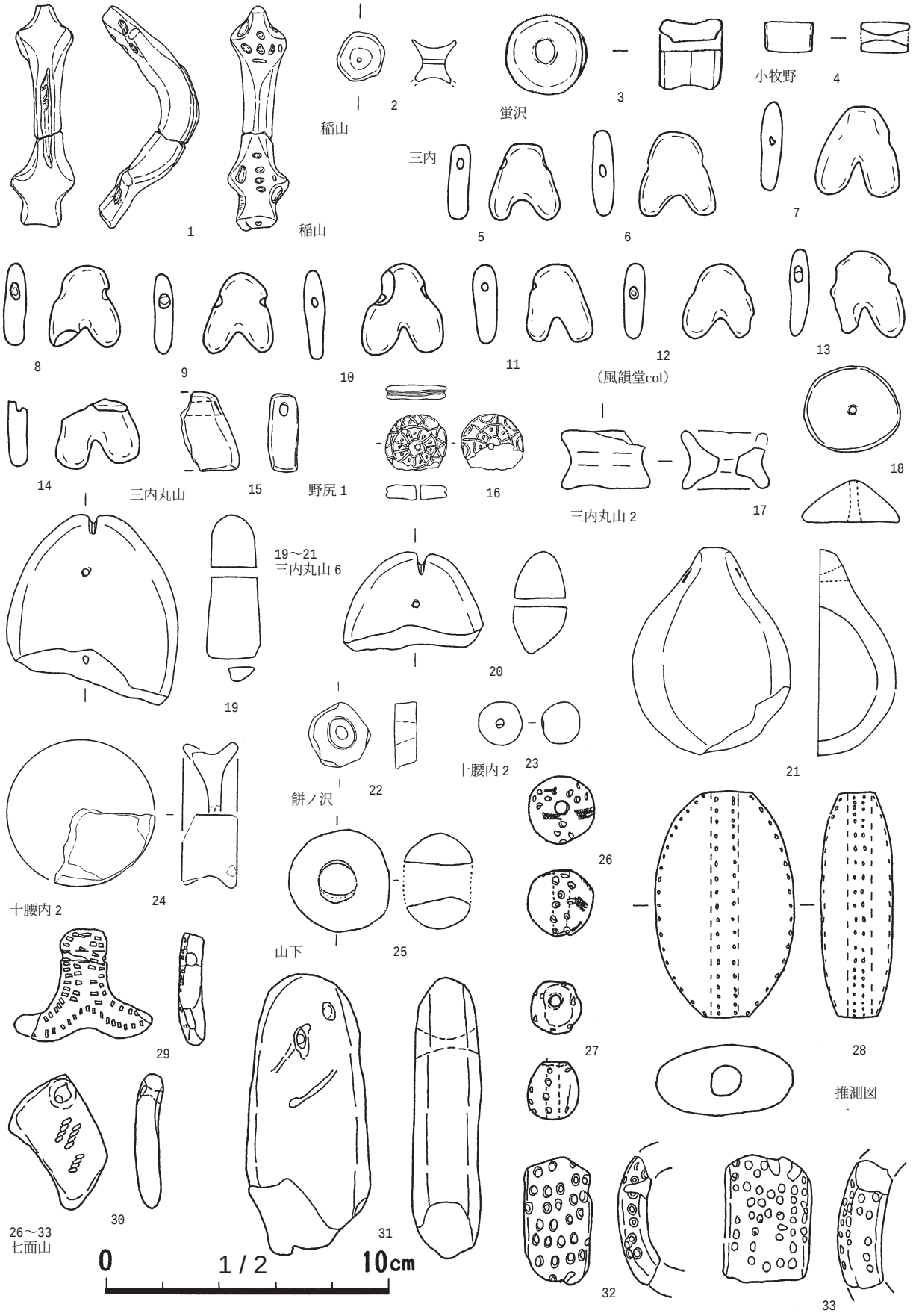
図版31　縄文時代追加 9（津軽地域24）



図版32　縄文時代追加10（津軽地域25）

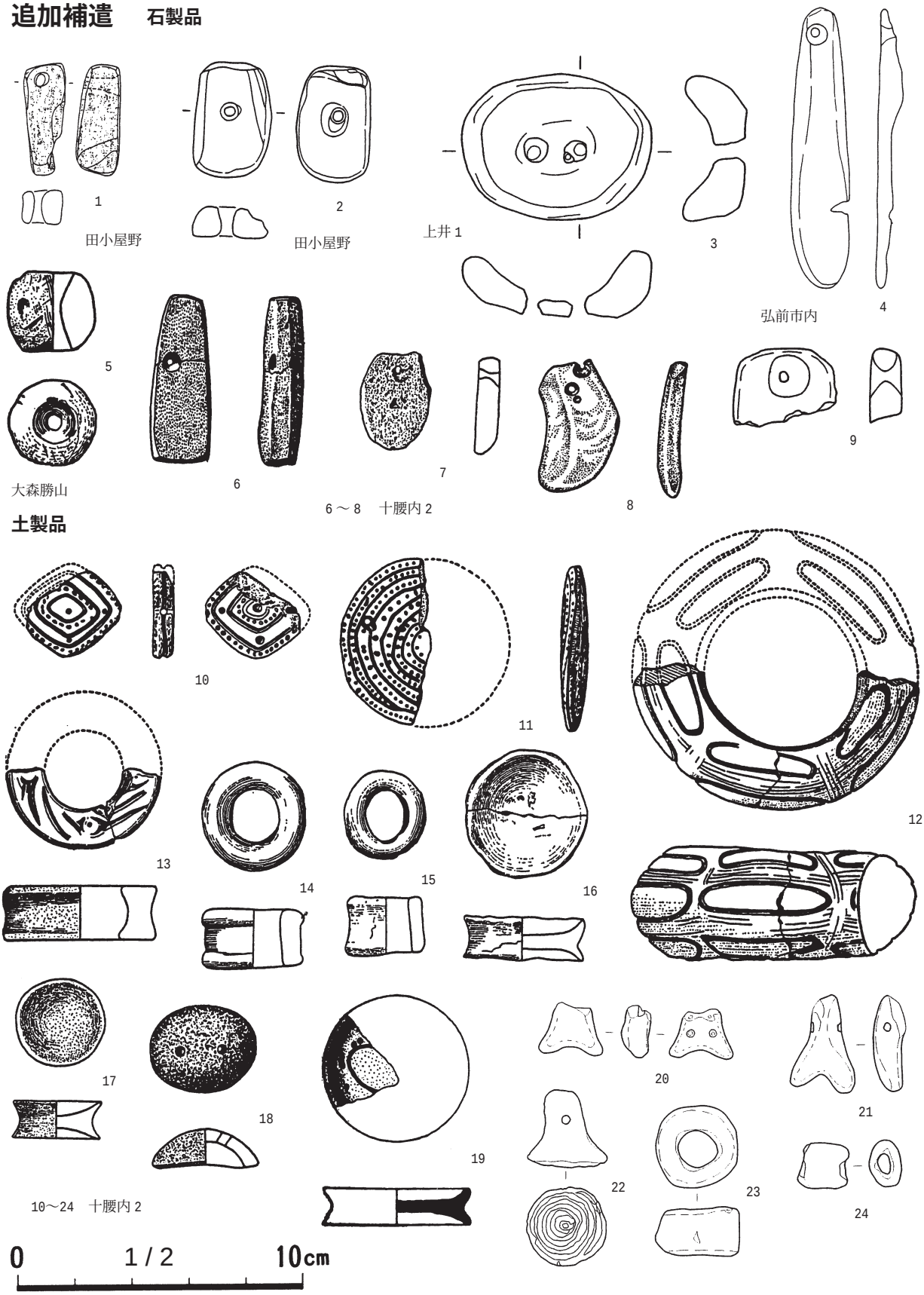


図版33　縄文時代追加11（津軽地域26）



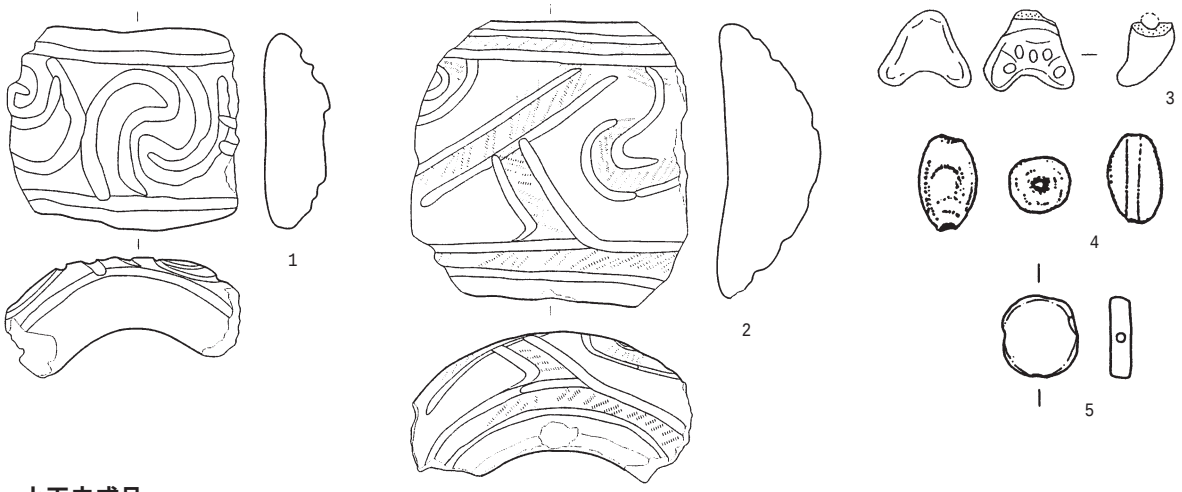
図版34　縄文時代追加12（津軽地域27）

追加補遺　石製品

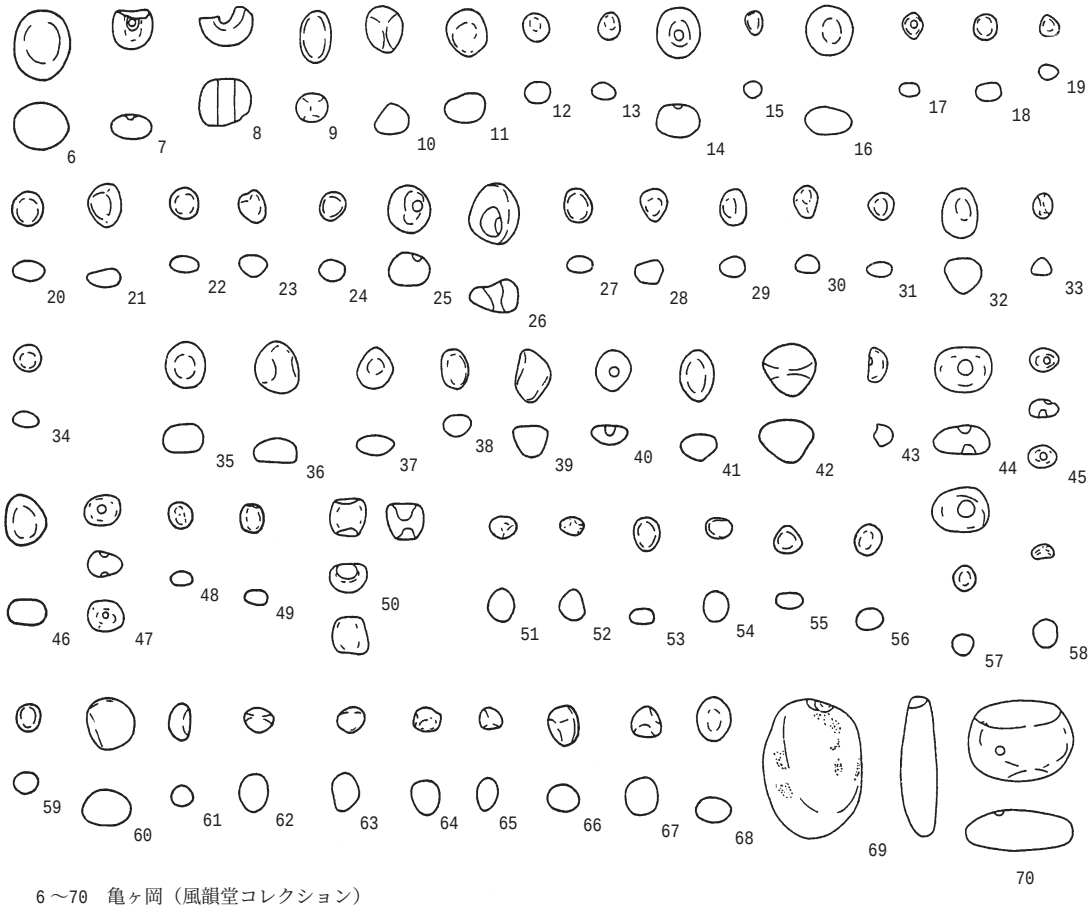


土製品

図版35　縄文時代追加13（津軽地域28）



小玉未成品



6～70　亀ヶ岡（風韻堂コレクション）

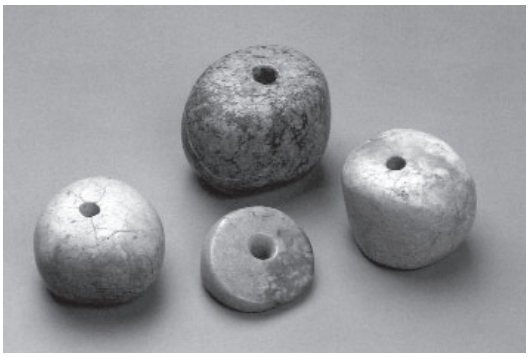
0　1/2　10cm

図版36　縄文時代追加14（津軽地域29）

青森県における装身具の集成

資　料　写　真

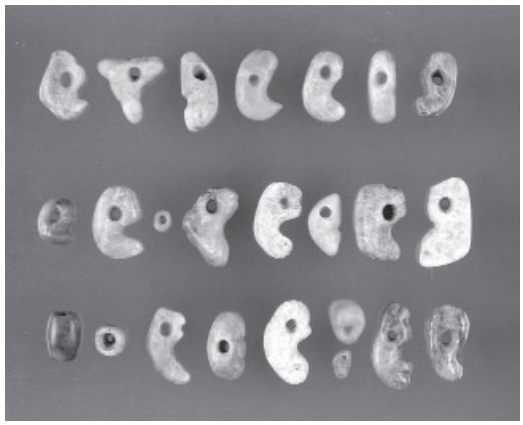
富ノ沢(2)遺跡　装身具類（縄文時代中期）



三内丸山遺跡　ヒスイ大珠（縄文時代中期）

上尾駮(2)遺跡　ヒスイ大珠（縄文時代後期）

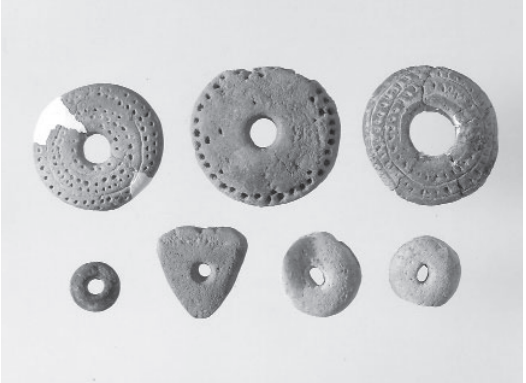
明戸遺跡　勾玉など（縄文時代晩期）



朝日山(2)遺跡　ヒスイ玉類（縄文時代晩期）

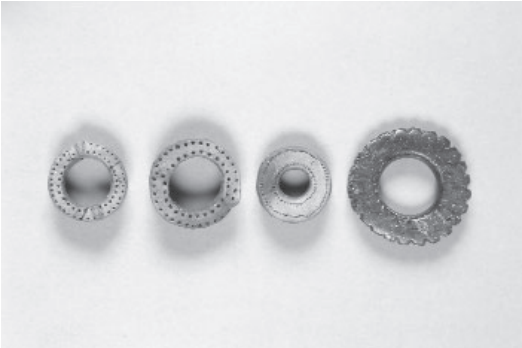
写真 1

上尾駮(1)遺跡　玉類（縄文時代晩期）



富ノ沢(2)遺跡　装身具類（縄文時代中期）

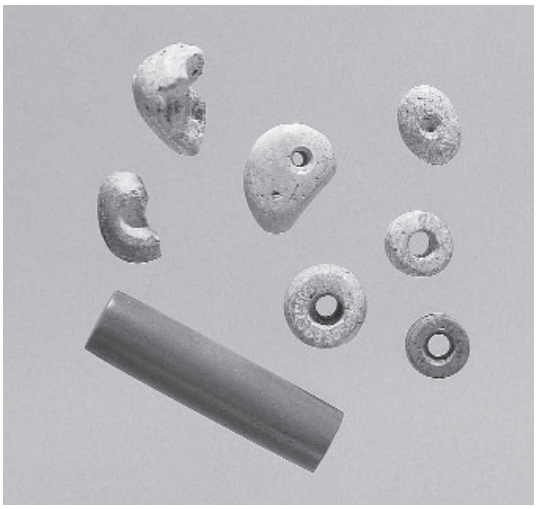
野場(5)遺跡　装身具類（縄文時代中期）



韮窪遺跡　装身具類（縄文時代後期）

是川遺跡　漆塗釧（縄文時代晩期）

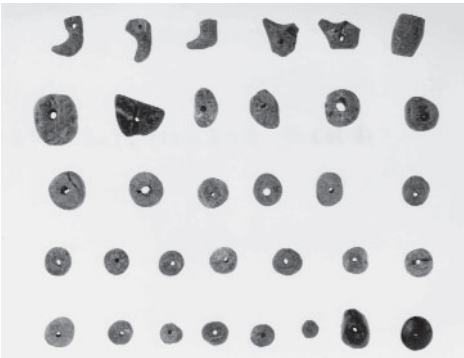
写真 2



砂沢遺跡　玉類（弥生時代）

宇鉄遺跡　管玉（弥生時代）

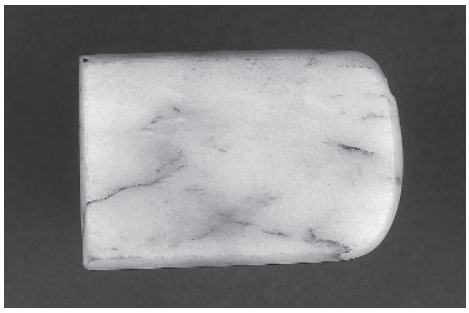
森ヶ沢遺跡　ガラス玉（続縄文時代）



森ヶ沢遺跡　コハク玉など（続縄文時代）

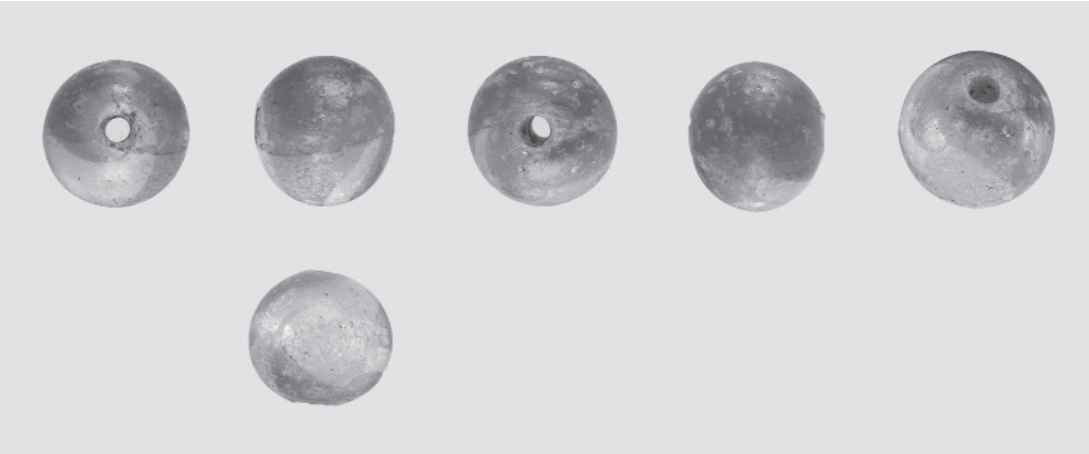
阿光坊古墳　玉類（古代）

写真 3

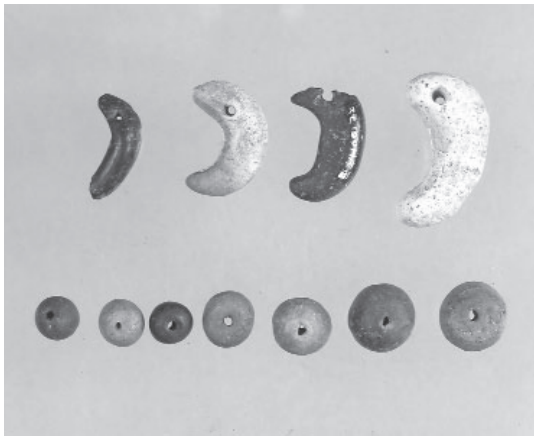


表館(1)遺跡　石帯（古代）

新町野遺跡　石製丸鞆（古代）



向田(35)遺跡　ガラス玉（古代）



李平下安原遺跡　玉類（古代）

野尻(4)遺跡土玉出土状況（古代）

写真 4

引用、参考文献目録（個人論文編）

伊東信雄、須藤　隆　1982　『瀬野遺跡』
梅原末治　1971　『日本古玉器雑考』
江坂輝弥、渡辺誠、高山純　1967　「第２節　大間町ドウマンチャ貝塚」　『下北』
江坂輝弥　1957　「所謂硬玉製大珠について」　『銅鐸』13
江坂輝彌編　1970　『石神遺跡』
大賀克彦　2001　「弥生時代における管玉の流通」　『考古学雑誌』86-4
小笠原雅行　1993　「青森県の古代玉類」　『青森県考古学』7
金子浩昌、橘　善光、奈良正義　1982　「最花貝塚第３次調査報告」　『むつ市文化財調査報告書』9
金子浩昌、鈴木克彦　1983　「風韻堂コレクションの骨角器及び自然遺物」　『調査研究年報』8
金子浩昌、忍沢成視　1986　『骨角器の研究　縄文篇Ⅱ』
工藤彦一郎　1888　「陸奥の珠玉」　『東京人類学会雑誌』4-33
工藤　肇　1971　「青森県山下遺跡の飾玉類」　『玉』2
五所川原市史編纂室　1991　「観音林遺跡出土の「石帯」について」　『広報ごしょがわら』742
斎野裕彦　1999　「東北の弥生から見た北海道文化」　『海峡と北の考古学』
鈴木克彦　1978　「「県重宝指定の亀ヶ岡遺跡出土遺物」について」　『調査研究年報』4
鈴木克彦　1983　「青森県田舎館村出土の勾玉と片刃磨製石斧」　『考古風土記』8
鈴木克彦、松岡敏美　1983　「小泊村大澗遺跡の出土遺物」　『とひょう』4
鈴木克彦　1984　「風韻堂コレクションの装身具」　『調査研究年報』９（青森県立郷土館）
鈴木克彦、川口　潤　1985　「亀ヶ岡遺跡沢根Ｄ区出土の遺物」　『調査研究年報』10
鈴木克彦　1987　「Ｖ字型土製品について」　『調査研究年報』11（青森県立郷土館）
鈴木克彦　1999　「東北地方北部における「焼けた」硬玉製大珠の類例と攻玉遺跡」　『調査研究年報』23（青森県立郷土館）
鈴木克彦　2002　「風韻堂コレクションの縄文土器（1）」　『調査研究年報』26（青森県立郷土館）
鈴木克彦、岩淵宏子　2004　「弘前市十腰内２遺跡の発掘報告」　『調査研究年報』28（青森県立郷土館）
鈴木克彦　2005　「緒締形、根付形、三角形大珠の研究」　『玉文化』2
鈴木克彦　2005　「青森県黒石市一ノ渡遺跡出土のヒスイ大珠二例」　『玉文化』2
鈴木克彦　2006　「津軽海峡下北半島海岸採集の翡翠玉と翡翠原石」　『玉文化』3
橘　善光、奈良正義　1983　「最花南遺跡第二次調査報告」　『むつ市文化財調査報告書』10
橘　善光、奈良正義、星　和夫　1984　「最花南遺跡第一次調査報告」　『むつ市文化財調査報告書』11
橘　善光、佐藤敏次　1989　「梨ノ木平遺跡第３次発掘調査報告」　『むつ市文化財調査報告書』16
橘　善光　2002　「東北地方北部の玦状耳飾」　『縄文時代の渡来文化』
茅野嘉雄　2000　「脇野沢村瀬野遺跡採集の玦状耳飾り」　『青森県考古学』12
樋口清之　1933　「櫛考」　『上代文化』11,12
樋口清之　1940　「垂玉考」　『考古学雑誌』30-6
福田友之　1990　「本州北端の硬玉（翡翠）製玉飾り」　『青森県考古学』5
福田友之　1995　「本州北端の琥珀」　『調査研究年報』19（青森県立郷土館）
福田友之　1999　「本州北端の玦状耳飾」　『研究紀要』４（青森県埋蔵文化財調査センター）
福田友之　1999　「本州北端の翡翠製装身具(2)」　『青森県考古学』11
古屋敷則雄　1985　「青森県平舘村今津遺跡出土の石製品」　『遺址』5
渡部　学　2001　「大光寺新城遺跡出土の土玉について」　『青森大学研究紀要』
藁科哲男、福田友之　1997　「青森県宇鉄・砂沢・垂柳遺跡出土の碧玉製管玉・玉材の産地分析」　『調査研究年報』21（青森県立郷土館）

紀要第11号「縄文時代編」正誤表

図版番号	資料番号	誤	正
図版 1	39	38	トル
図版 2	15		瀬野
図版 4	10		同一個体
図版 4	24	縄文勾玉	勾玉
図版13	11		**土製品**
図版14	1		**土製品**
図版15	2		**土製品**
図版18	17	上蛯沢 2	上蛇沢 2
図版20	6		丹後谷地
図版23	20	是川中居	二ッ森
図版23	キャプション	南部地域18	南部地域19
図版24	10	是川中居	トル
図版24	15	15～20	15～21
図版24	16	21～25	22～25
図版25	38～43	是川中居	泉山
図版26		**管状有孔**	**環状有孔**
図版27	3	明戸	上田

図版番号	資料番号	誤	正
図版27	5	上田	明戸
図版31	4		八幡
図版33	18	三内丸山	稲山
図版37	15		十腰内
図版39	152		重複により削除
図版39	155～162	玉清水	長森
図版41	121の上に		**管玉**　を挿入
図版42	7	8	トル
図版43	13～15	三内丸山	稲山
図版45	14		近野
図版45	21	近野	三内丸山
図版46	17		**土製品**
図版48	17	今津	宇鉄
図版48	23	小三内	小牧野
図版49	11		小牧野
図版50	21	今津	宇鉄
図版51	37，38		36と同一個体

青森県埋蔵文化財調査センター　研究紀要　第12号

発行年月日　2007年（平成19年）3月2日

発 行 機 関　青森県埋蔵文化財調査センター
〒038-0042 青森市新城字天田内152-15
TEL 017-788-5701　FAX 017-788-5702

印　刷　所　東北印刷工業株式会社
〒030-0902 青森市合浦1丁目2-12
TEL 017-742-2221　FAX 017-765-1115

BULLETIN

OF
AOMORI PREFECTURE ARCHAEOLOGICAL ARTIFACTS RESEARCH CENTER

No.12

CONTENTS

THE AGGREGATIONS OF THE EXCAVATED ORNAMENTS
IN AOMORI PREFECTURE

THE YAYOI～HEIAN PERIOD
AND THE JOMON PERIOD

March 2007

AOMORI PREFECTURAL ARCHAEOLOGICAL ARTIFACTS RESEARCH CENTER

この印刷物は400部作成し、印刷経費は 1 部当たり1,838円です。